

389

73



始

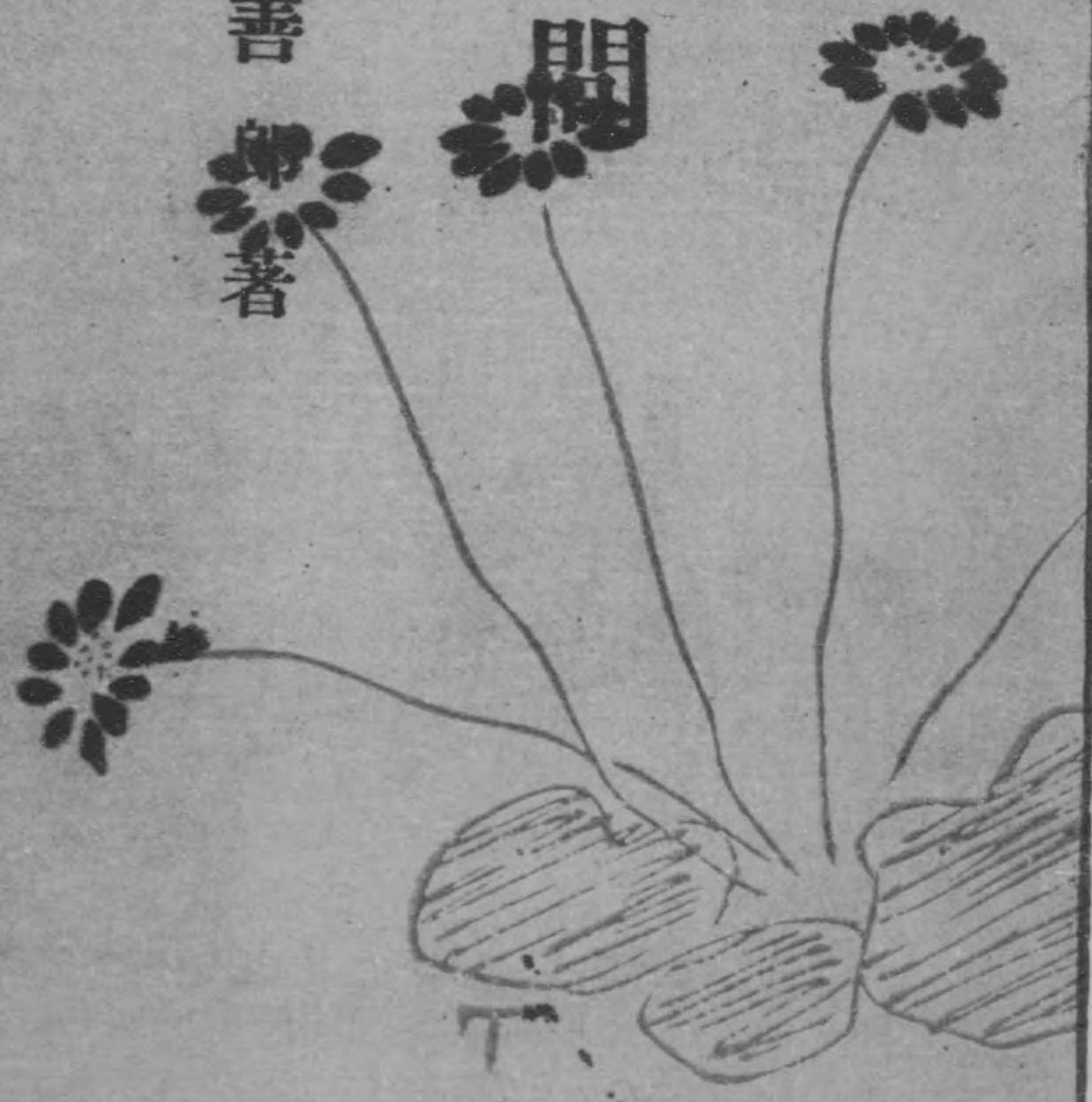


二

週

閱

長與善卿著



389-73



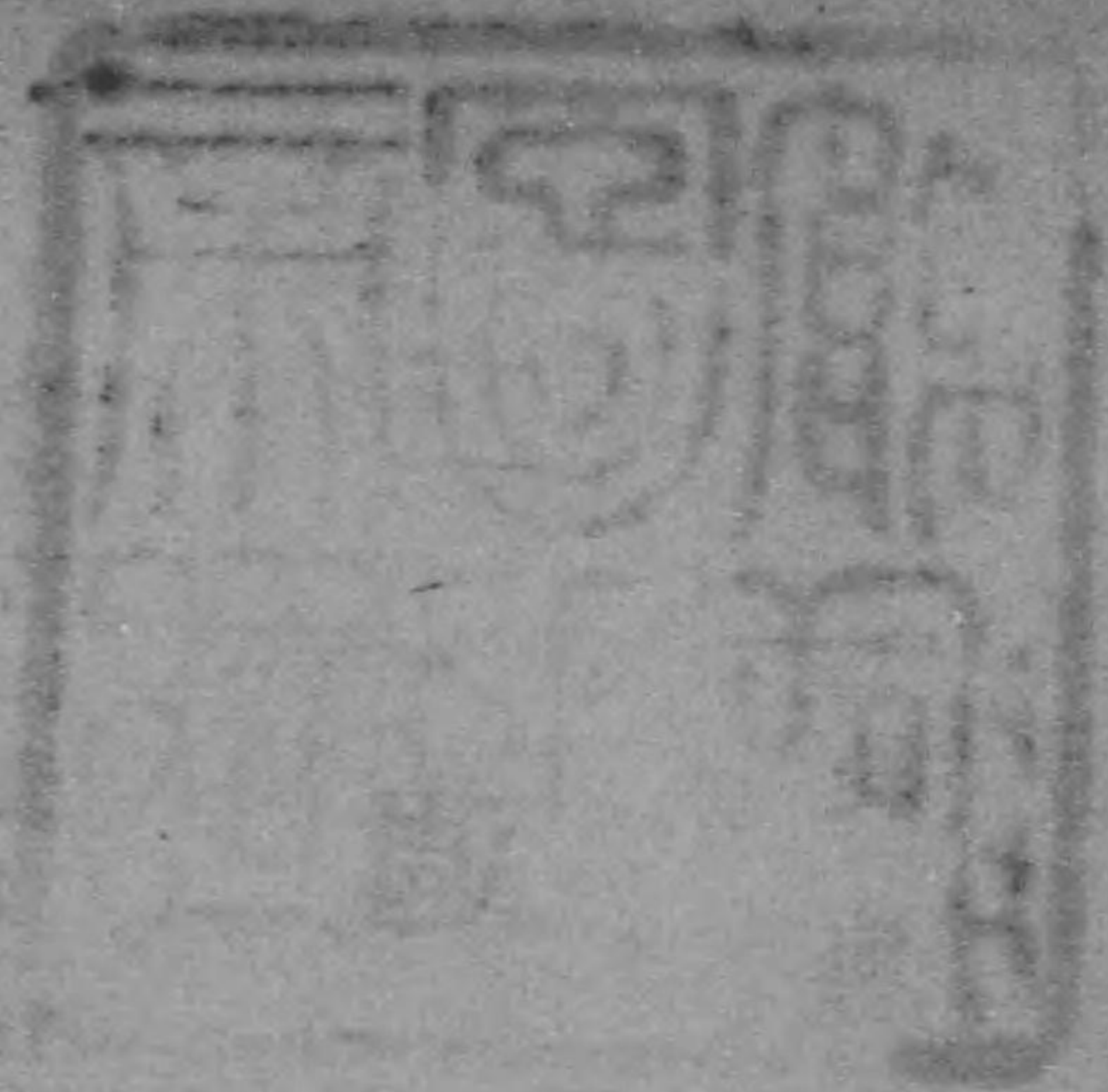
金星堂名作叢書(16)

長與善郎著

週間



大正  
11. 5. 4  
版肉交星金





間

長與善郎著



### 此二つの作についての自序

「二週間」は大正三年一月の作で、自分の脚本としては最も古い處女作とも云へるものである。それは自分の最初の單行本「盲目の川」と同一事件の體驗から生れた本當の意味での姉妹篇であつて、而も「盲目の川」の前に書かれたものである。

其時分戯曲の形式や、技巧等に未だ知識經驗が乏しかつた爲め、書き方には西洋物、就中正直に云へば、ストリンドベルヒのそのの感化をうけてゐた。それが後から見ると非常に氣になつたのと、その書きぶりの幼稚さとの理由で、自分は其後洛陽堂から出して、今では絶版になつてゐる自分の知られざる作集「求むる心」の中に一度此作をのせたきり、再び、世に之を公表する氣にはなれなかつた。實を云ふと「求むる心」は早く絶版になればいゝと迄思つてゐた位である。處がいつであつたかわりに近頃ふとそれを讀んで見て案外いゝものだと思つた。何と云つても此作の生れた動機とその實感とは矢張りさう云ふ體驗を眞にしてゐる時でなければ得られない貴といも

のである。眞實味から来るフレッシュな力を持つて生きてゐる。此生きてゐると云ふ力は形式上の或る他からの感化なぞから生れ得るものではない。本當の自分の心から、血と肉とからのみ必然に出る獨立のものである。それを此儘で葬むるのは惜しい。もし之に多少の添削を加へれば再び世に出して決して恥しいものではないと思つた。それに自分が此作を書いた當時のいろ／＼の面白い、なつかしい思い出も甦つた。其處へ金星堂から話があつたので、自分は思いきつて此舊作に大斧鉞を加へた。かくて此作の面目は一新された。自分は今此作を再び世に公表する事に新たな自信と安心とを持つてゐる。新しい創作をしたやうな氣がしてゐる。

加之、此作が始めて雑誌白樺に出た時は戯曲と云ふ名は厚かましい、對話と名づくべきである、と云ふやうな、今から思ふと尤もな非難を蒙つたものであるが、今度の此作なら舞臺にのせても相當効果もあり、面白くも見られ得る「戯曲」になつたかと思つてゐる。劇としてはなほいくらかまだ單調な氣味は脱しないであらうが、併し充實がその短處を補つて居り、殊に終りの方では立派に劇的であると信じてゐる。

「孔子の歸國」は今から三年許り前の作で「二週間」よりは無論ずつと新しい。一度以文社と云ふ本屋から出した事があるが、之も亦不遇で、その本屋はつぶれて了つた。それで、自然それが絶版にもなつた機縁を生かして「二週間」と共に再録する事にした。此作は一度白樺演劇社の手によつて有樂座に一日丈け上演した事がある。その時に感じた缺點を、今度此機會に當つて又訂正し、全體として四ページ餘り削り取つた。故に此作は前から好きなものではあつたが、今度更に會心な作となつた譯である。

純然たる舞臺劇としてはまだ少し白の長いと云ふ嫌いはあるが、白の長いと云ふ事も或る程度迄は、作にリズムがあつて、役者がそのリズムに乗つて本當にやりこなしてゐる時は決して退屈な感を與へるものではない。よき佛畫や、佛像に見る如き莊重な、しんみりした感じは或る白の長さから生れる事がある。此作を見畢つた後に残る森とした深い感銘は一つは孔子や弟子達のじつとして、そは／＼せずに落ちついてしんみり諷舌る味からも來てゐると信ずる。一概にけなす事は出來ないと思ふ。

兎に角自分は此二つの作を今此選集の中に新たに收めて出す事を喜ぶ者である。

なほ、此二つの作は此書に改訂されて載つてゐるものが正しいので、「求むる心」や「孔子の歸國」につてゐる分は不正であり、それらは取り消すと云ふ事を茲にはつきり斷つておく。

一九二二年三月

著者

目次

序文……………一—四

二週間(一幕劇)……………二

孔子の歸國(一幕劇)……………六

二週間 (一幕劇)



登場人物

男

女

〇

下宿の老婆

ある下宿の二階にある男の書齋。中央より少し右に寄つた處に亂雑になつた机、其上にランプあり。藤の椅子二脚。中央に小さきテーブル。テーブルの上にはガラス製の花瓶に草花

が少し活けてある。火鉢。左手の奥に亂雑に寢床が疊んである。寢床の側の壁には鏡がかかつてゐる。衣桁には女の普段着。男の上被抔だらしなくかけてある。猶室の左右に一つ宛窓あり。窓の上や處々に額がかゝつてゐる。風強き冬の夜。窓は風の爲めに時々ガタ々とする。

年頃二十六七の男一人机に凭り頻りと何か書き物をしてゐる。

男 (起ち上り少しやけ、氣味に) あゝ駄目だ。 (室内を彼方此方歩き、時々ハタと立ち停まつて耳を澄ます。ドアをあけ、暗き廊下の方に向ひ) もしく。もしく! 火があつたら少しくれませんか。

老婆の聲 へえ。

廊下からの寒い風が吹き込んで来て机の上の紙を吹き飛ばしランプを消し相になる。

老婆 (十能を持つて入り來り) お寒うございますね。(と火鉢に火をつぎながら) いつも

お一人でお淋しふございませう。(同情するやうな擲論ふやうな顔して男を見る)  
男 まだ雪はふつてゐるんですか。

老婆 (窓の方を見て) なんですか吹雪になつたやうでございませぬ。(去る)  
男 (溜息をつき風で散らばつた紙を拾つて机の上にたゞみ乍ら急に疝癪を起してドンとそれを

敲き) ツェツ! 何と云ふ馬鹿々々しい話だ! 全で山に放した孔雀の番をしてゐるやうなもんだ。こんなにして居た日には一生たつたつて何一つ出来やしない。ほんとに。(時計を出して見て) 十時二十分前か。——一體何處をうろついてゐるんだな。此吹雪に。こんな夜更け迄。まさか……(と不安に堪えない様子で) ツェツ! 自分乍ら自分の馬鹿さに愛想がつきる。こんな馬鹿な運命を作るなんて。それも無理やりに。——あゝ……

彼方此方歩き廻つてから絶望的に椅子にドカンと腰を卸し火鉢を引きずり寄せ、煙草に火

を点ける。そして體を真直に伸し兩手を頭の後ろで組む。そして煙草を喫かしく暫く無言の儘である。暫くして扉の外で晴やかな女の聲聞こえる。と男飛び上り、急に快活な元氣に溢れた様子になり、思はずドア迄行くが開けずに戻らうとする。と、彼の情婦派手な上被コートを着て快活に入り来る。男努めて冷靜にじつとして皮肉な目で女を睨むのである。

男 大層早かつたね。今夜は。

女 どうも御待屈様。……おゝ寒い。(手袋をぬぎ兩手を揉む。少し雪のかゝつたコートをはたいた丈で脱がずにゐる。)

男 まあ此處へ来てあたるがいゝ。什うしたんだい。大變頬つぺたが赤いやうぢやないか。

女 (笑ひ乍ら) えゝ。少し酔つぱらつて來たの。

男 ふむ。俺はお前が感心に酒は飲まないと云ふことは知つてゐるさ。又飲まれち

や堪らないからな。……だがお前正直な話、俺は随分待つたぜ。ほんとうにかう毎日毎晩出歩いて許り居られちや俺は逆も堪つたものぢやないよ。

女 (微笑み乍ら) そんなら貴方も出歩いてゐりやあいゝぢやありませんか。誰も貴方に留守をしてゐて呉れと頼んだ譯ぢやなし。

男 俺が餘り出歩くことの好きでないことは、お前にも分つてゐるやうなものと思ふがね。それに行つて見度いと思ふ處が第一ありはしない。(間)

女 (落付いて) 一體何して暮して居るの一日。

男 (笑ひ乍ら) それや此方で訊くことだ。何をしてゐるんだお前は毎日外へ出て、よくもそんなに出掛ける處があつたもんだな。

女 そりや世の中は廣いから行く處はいくらだつてあるわ。

男 だが差し詰め先づ何處へ行く。Bの處か。

女 Bはもう飽きちやつたわ。妾は飽きつぽいんですからね。

男 そんならOの處か。しかし今朝お前はBの處へ行くと云つて出掛けたぜ。

女 途中で考が變つたの。

男 でOを誘つて相不變AやBやDと方々面白相な處を飛び歩くんだね。飽きもせず。そして男許りの中に女が一人混つて。

女 まあそんな處ね。……でもそんなに妾のことが氣になるなら貴方も妾と一緒に來れやいゝぢやありませんか。しかしそれは嫌なんでしょ?

男 とお前は安心しきつてゐるからそんなことを云ふ。俺もそれは不愉快さ。お前の好きな奴等は皆んな俺の嫌いな奴ばかりと來てゐるからな。しかし俺はもうこの儘にして何時迄も見てゐる譯には行かない。明日からは俺も一緒に行つてお前達のお仲間入をするよ。

女 (軽く) どうぞ。貴方にお出来になるなら。

男 (女のコートを脱がずにゐるのを氣にするらしく) 何故お前は上被を取らないんだね。此室はそんなに寒い筈はないんだが。

女 (からかふやうに) 何か譯があると思つて？

男 (平然と) 何もないね。

女 處があるのよ。

男 ある事は分つてゐるがそれ位の謎ぢや俺も驚かないよ。

女 へえ。只ね、此室が汚れてるでしよ。だから着物を大切にしている迄のことなの。今着物を着換へるのも面倒臭いから。

男 ふん、まあそんなことは仕うでもいゝとして、お前はそんなにして飛び歩つてゐる間にちよつとでも俺のことなんぞ考えるやうなことはないのか。

女 あつてよ。中々あるわ。

男 尤も猫を飼つてゐる者は他所へ行つて猫を見たりすると一寸自家の猫のことを考え出したりするから、考えると云ふことは何でもないことだが、しかしまあ仕う云ふ意味でだ。お前が俺のことを少しでも考えることがあると云ふのは。

女 何時も同じ意味で。

男 良心に咎めてか。

女 (笑ふ) へえ、良心ですつて？ まあそれはどう云ふ譯？

男 (苦笑す) 負け惜しみはお互に止さうぢやないか。そりやあ俺だつて俺がお前の良心の住所の全部を占領してゐるとは云はないさ。しかし全然その部分をなしてゐないとお前が云へばそれは嘘だからな。

女 何の事か分からないわ。——つまり貞節と云ふ意味なの？

男 (氣が引けるやうに) うむ。まあ、さうだ。

女 まあ、あきれた。圖々しいのね。貴方も。

男 ではさう云ふ意味でなくつてもいいが、とに角お前は自分の良心に對しては忠實だらうな。

女 勿論ですわ。ですから妾は妾の爲度い放題な事をそれに従つてしてゐるのだわ。

男 そうかしら。お前は俺がお前の良心に入り込んでゐることを認めない風をしてゐる。そしてお前の良心に従つて勝手なことをすると云ふ。しかし事實お前は俺の妻として俺とかうして同居してゐる。それもお前が自分の良心に従つて何等の矛盾なく執つてゐる行動の一つかね。

女 ちや妾に出て行けと仰るの。

男 ふん、又そんな出鱈目を云ふ。お前には俺の云ふ心持が分らないのか。

女 妾は巫山戯るのが好き。丁度妾が一寸した矛盾を好くやうに。

男 ふむ。お前には興味が全部なのだからな。しかしそれもよからう。巫山戯る女は巫山戯る男よりは未だいくらか見好いものだ。俺だつて時によつては随分巫山戯ることもある。しかしそれは物事がちやんと安定して後の餘裕だ。

女 ちやんと安定してゐるぢやありませんか。

男 お前は俺を揶揄いさへすれやそれで俺に克つたと思つてゐる。が俺は平氣だ、俺は弄ばれて克つ男だ。

女 夫婦の間で勝つも負けるもないぢやないの。それはそうと、もう妾達と一緒に同居してから幾日になるでしやう。

男 もう恰度二週間になるよ。だが俺にはそれが何だか昨日から始まつたことや

うにも思へるんだ。

女 まあ未だ二週間しか経たないの？ 妾はもう一ヶ月も経つたやうな気がするわ。

男 實は俺もその通りに感じてゐるのさ。何しろ之ぢや全く結婚したものゝ共同生活ぢやないからな。落ちついたと思つた日は唯の一日だつてありはしない。だから初めから結婚はしなかつたぢやありませんか。妾達は只の知合同士が二人で同じ家に住んでゐると云ふ丈けだわ。それが生憎男と女で、男の方はその女を戀してゐると云ふのですわ。

男 ぢやあ之れからはそう云ふ關係を止めて、新たに夫婦の間柄として同棲しやうぢやないか。

女 そんなことは今始まつた貴方の要求ぢやないぢやありませんか。妾は一體貴方

の何でしやう。戀人でしやうか、妻でしやうか。

男 兩方だ。ね。お前は俺に云つた言葉をよく思い出して見るがいゝ。お前は俺を戀することは出来ない。しかし戀しないでよければ俺の處へ来る。そして妻になる。と云つた。

女 若し貴方が目に見えた不幸を耐え忍ぶ心算ならば。そして妾からの止むを得ない侮辱や冷遇を甘んじるならばと云ひました。

男 兎に角吾々二人はそう云ふ條件で式こそ擧げなかつたが、事實結婚したのだ。だからお前は俺の妻ぢやないか。

女 えゝ、形ではね。しかし事實は妾は一度も貴方の妻だ杯と自分を思つたことはなくつてよ。仕うしてそう思へるでしやう。

男 (落付いて) お前は案外正直な女だな。

女 なあぜ？

男 約束を破らなかつたからさ。

女 正直で親切だわ。

男 しかしお前はその約束を破らなかつたと云ふことを後悔してゐるだらう。

女 え、實は昨日あたりから。

男 始めからではなかつたね。

女 え、妾そんな馬鹿な犠牲は拂いませんわ。

男 一つ生活を變へて見やう。獨身の單調な生活に倦んでゐたお前はそう云ふ悪戯氣な好奇心から俺と同棲して見るのも一寸面白からうと思つたのだね。

女 まあその位の處でしやう。どうせ一時的だ。せいゝ永延びして二週間位のものと思へましたからね。

男 (少し皮肉に) そうだらう。しかしお前も随分向ふ見ずな冒險をやつたもんだね。

女 え、其位の好意は貴方にあつたの。それはほんと。つまり事によると二週間が三週間位に迄はなるかも知れないと云ふ。

男 (冷静に) それは喜んで籠の中に飛込んで来る小鳥の運命と同じだ。成る程俺は當分の間兎も角も俺と同棲して見るがよからう杯と始めには云つたさ。しかし其當分の間と云ふのは云ふ迄もなくあの時の俺の口實だ。それ位の俺の計畫がお前に分らなかつたとすると……………

女 妾は餘つ程馬鹿だと云ふんでしょ。つまり貴方は妾を無理にも掠奪する心算だつた。處が生憎貴方の竹細工の籠は妾のやうな鳥を圍んでおくには少し弱過ぎた譯なのね。妾と云ふ鳥は毎日朝から晩迄こつこつて樂に籠から抜け出して彼方此方飛び廻つて居ます。そして貴方は側でぼんやり手を束ねてそれを見てゐて別に

どうする事も出来ない。

男 いや、それは只俺のお前に對する愛が盲目過ぎたからだ。つまり俺はお前を甘やかし過ぎた迄の話だ。實は俺がほんとうにお前を虜にしやうと決心したのはたつた今のことだ。お前は毎日俺がお前の出掛けるのをとめ得ないと云ふことに圖に乗つて無暗と出歩いてゐる。と云ふのも實はお前が出歩くことが好きだからと云ふよりも、只俺にアテツケがして見たくつて、人を不快がらせる意地のわるい興味からそれ程出歩き度くもない時に迄御苦勞様に出掛けるんだと云ふことも俺が知らないと思つてるのかね。

女 ねえ。貴方かう云ふことを知らない？ 戀と云ふものは自發的に起つて來る偶然のもので、報酬的に起り得るものでないつてことを。だから戀の場合には恩を被せると云ふことは絶對的に出来ないんですよ。しかし妾は貴方に向つて恩を被

せることは出来るの。なぜつて貴方は妾を戀してゐるけれど、妾は貴方を戀してはゐないんだから。お氣の毒だとは思いますが、これも妾の意志ぢやないんですから仕方がありませんわ。……あゝあ二週間。随分長いこと妾も貴方に親切を盡したわね。これこそほんとうの恩ですわ。

男 あり難ふ。だがその二週間が二年にならうが、二十年にならうが、もうお前は二度と再び元との棲へ戻ることは出来ないのだ。お前はとも角も俺の妻として俺と一生を共にすべく生れた女だ。

女 (男の辭に頓着せず) 貴方はだから何故妾と一緒にゐる間妾の奴隸のやうにして生きて行かなければならないかと云ふことが分つたでしょ。つまり妾は貴方に最も大きな恩を施してゐる。貴方はその恩に比敵する何物も妾に供給することが出来ずに、只その恩を喰べて生きて行くと云ふ點で。妾は何も昔の暴君のやうに奴隸



なんぞ欲しくはありません。けれどもし貴方が妾から自由にならうと思ふなら貴方は妾から離れなければならぬ。處が貴方は妾に捨てられる位なら未だしも妾の奴隷である方がまだだと思つてゐるんでしょ。(男が苦し氣に黙つてゐるので少し狎れしく) だけど妾だつて實は中々貴方に同情があるのよ。妾は貴方を一生そんな風に腐らして了ふのを見るに忍びないわ。ですから妾もう貴方から別れて上げやうと思ふの。それが貴方の爲めにいゝと思ふから。恰度妾に逢はない前に貴方が一人で立派に生きてゐられたやうに、之からも寂しいなりに生きて行けるでしょう。ね。それが貴方の運命だわ。貴方は可哀相な人ね。

男 (暫くして) うむ。俺は可哀相な人間かも知れない。しかし只可哀相許りの人間でもない。お前は、俺の爲めに俺から別れやうと云ふ。しかしその心は只お前が俺を恐はくなつた爲めに俺に飽きたと云ふ風を街つた迄の事だ。まあしかし、俺は

今迄お前のそう云ふ我儘な性質に惚れ込んで来た。だが道は俺がお前の奴隷で一生通すか、それともお前から別れるか二つしかないとお前には思へるかね。俺にはお前がも一つの道を俺が取ることを豫知してゐるが爲めにそろ／＼俺から逃げ仕度を始めたと云ふことが分つてゐるんだ。俺が籠の中に喜んで入つて来る小鳥の運命だとお前の向ふ不見を笑つたのはその點だ。俺は今が今迄態とお前の愛に曳かされて竹細工の籠しかお前に當てがつかつた、と云ふよりも實は只籠の蓋を開け放しにしておいてお前の得意がつて飛び出す笑顔を見て慰むより仕方がなかつた。お前はそれを自分に鐵の翼があつたからだと自惚れてゐる。だが人の好い俺ももう何時迄も手を束ねてお前の馬鹿な專横を宥しておく譯には行かない。俺は方針を更へた。お前のやうな女に對する俺のやり方は間違つてゐた。俺は愈々第三の道を取ることを餘儀なくされた。これからは俺がどんな人間だか

と云ふことを露き出しにお前に見せ付けてやらう。

女 (微笑し乍ら) 妾の暴君にならうと云ふのね。面白いわ。なれるならなつて御覽なさい。お互に本性を發揮しましょう。人間は本性を發揮する時に一番見て居て面白いから。

男 俺にとつては本性も偽性もない。どれもこれも本性だ。だがそんなことは仕うでもいゝ。兎に角之から俺はお前の奴隷から一躍して暴君になる。明日から此處は牢獄で、お前は囚人で、俺は牢番だ。いゝか。もう一步だつて俺はお前を此室から外に出しはしない。

女 (媚びるやうに) 妾貴方が少し可愛くなつて來たわ。貴方が本物の奴隷であつた間貴方の顔や風采はそれは澁臭くつていじけてゐて見られたものぢやなかつてよ。だけどこれから貴方は暴君に出世した心算でゐればもう少し堂々とした風采に上

るでしよう。處で妾は仕うでしよう。貴方は妾の暴君的な性質に自分の性質と調和するものがあると思つて一つにはそれに惚れ込んだんでしょ。えゝ妾は生れつき女の暴君よ。そして暴君である時にのみ妾であり、従つてその時にだけ妾は美しいでしよう。つまり何のことはない。妾は上から見れば醜くつて下から見上げてゐさへすれば何時も美しい山のやうな女ですわ。妾は奴隷になれる女でもないけれど、妾を奴隷の心算で貴方が上から見やうとする時、妾はもう妾ではなくつて本物の奴隷よりも醜い、取り柄のないそして最も不快な代物にしかならないと云ふことが貴方には分らないんでしようか。そして其爲めに貴方が益々不幸にしかならないと云ふことが。

男 分つてゐるさ。だからこそ俺はお前を有りの儘に見ないで理想化して見てゐたのかも知れないさ。いや今でもまだだ。しかし元とく最上の幸福杯を望むこと

は出来ない」と観念してゐる俺にとつてはその不幸さへも一番軽い不幸なのだ。俺達は互に暴君同士だ。暴君同士であればこそ俺の氣に合ひもしたのだが、又同時に和合する譯にも行かなかつたのだ。そうかと云つて俺の運命がお前の運命の足下に踏み躪られて死んで了ふなんてことは吾々二人の運命以上の運命が承知しない。

女 (小さな欠伸をする) あゝ眠い。

男 (苦笑し乍ら) ぢや寝たらいいだらう。俺も寝るよ。寢床の上でも充分話は出来る。若しなんなら又明日してもいいよ。

女 貴方先きに寝たら仕う? もう議論なんぞ止しにして。

男 ふむ。お前が閉口なら止してもいいが。——處で一體暴君同士で妥協すると云ふことは出来ないものかね。

女 (蒲團の上に半ば寝そべつて眩枕を突きながら) そうね。かうしませうか。今日は妾

が貴方の主人になる。其代り明日は貴方が妾を召婢にする。明後日は又貴方が下男になると云ふ風に毎日代りばんこに……

男 (賤しく苦笑し乍ら) 何だつて? 馬鹿。

女 (得意氣に微笑み) 貴方は心の中では甘いことを云つて呉れたと思つてすつかり喜んでるんでしょ。そう顔に書いてあつてよ。

男 馬鹿な。そんな下らない……

女 (眞面目臭つて) いゝえ。決して串戯ぢやないの。貴方さへ一言「うん」と承知する心算なら妾は明日からでもそれを實行して見せるわ。ほんとに!

男内心の苦しき當惑を隠しきれね賤し氣な眼付きを以て無言の儘暫く女の顔をジツと凝視めてゐる。男の顔は段々熱して来る。女見兼ねて一寸噴き出す。そして慌てゝ甘へるやう

な表情を以て男の顔を眺める。

男 (飛び上り) 何と云ふ可愛い奴だ、お前は!

女を抱いて接吻しやうとする。女それを突きつけて起ち上り、男を睨みつけ乍ら机の上の手提げを取る。男慌て、扉の錠を卸す。女苦笑しく笑ふ。

女 未だ窓が二つ開いてるわ。

男 此處は二階だ。飛び降りれば下はタ、キだ。

男、興奮して室の中を行つたり來たりしてゐる中に何氣なく机の側を歩き、氣が付かぬやうに袂の中に鍵を入れる。女鋭くそれに注意して居乍ら氣の付かぬやうな風を装つてゐる。そして落付いて椅子に凭り、ハンケチで顔を煽つてゐる。やがて煙草を取り、

女 (甘へるやうに) 煙草は什う?

男 (立ち止まり) うむ。一つ貰はう。先刻から未だ一服も吸ふ暇がなかつた。

女 マッチを擦つて男に火を與へる。

男 (一服喫かし乍らジロく女の顔を眺め) 什うしたんだい。いやに珍らしいことをするぢやないか。

女 (無頓着に) 少し熱過ぎるわね。其方の窓を少しお開けなさいな。今風が少し止んでるから。大丈夫よ。妾逃げなんぞしないことよ。

男 (一つの窓を三分の一許り上の方を開ける。やがて) 俺が昨夜お前にキスしたことをお前は知らないだろ。

女 知つてるわ。貴方は毎晩妾の寝顔にキスしてるんでしょ。全で色魔の泥棒見たやうに。

男 (女の側に腰を掛け) お前がおきてゐる時はうつかり出来ないんだから止むを得ないさ。俺は三時頃ふと眼を覺ましていゝ月に照らされてゐるお前の青白い顔を見

た。お前は胸迄乗り出して晝間の荒くれた本性にも似ず、如何にも殊勝な、つましやかな女らしくすやくと平和に眠つてゐた。何だか眠つてゐるやうでもあり、眼を開いてゐるやうにも見えたつけ。で、俺は始め長いことお前の唇にそつとキスをした。それからお前の胸に俺の額を押し付けた。そして心の中に色々のことを祈り乍ら靜かにそれをお前の乳房の方へずらした。そして俺はお前の乳房の處を少し開けてそのむつちりと脹らむだ先を舐つたのだよ。何だか子供の時阿母さんの乳首を舐つてゐる時と同じやうないゝ氣持だつた。(女嫌な顔をする)俺はだけどそれを舐り乍ら一層のこと一噛みに噛み切つて了つたらとも思つたんだ。そして其先からどくどくと血の迸る様や、お前の狂い苦しむ様を想像して見たりしたよ。(だんく女を抱き乍ら)しかし俺は暫くして其乳房をチャンと又襟の間に收つて、お前の甘い規則正しい眠息をその儘そつくり吸い込んで吐き、吸い込

んでは吐きした。胸の奥迄深くくくな。何だか阿片でも吸つたやうな甘い苦しい氣持ちがしてふらくしたつけ。は、お芽出度い話さ。

女 (露骨に輕蔑の表情を以て) そして妾の脇の下へ頭を突つ込んで眠ちまつたんでせう! そんな處も貴方のいゝ一つの本性ね。

男 だから面白いだらう。しかしまあそんなことを云ふ必要もないさ。俺は只俺が始終お前の心や運命をキスしてゐるやうにお前の肉體もキスし度かつた迄だ。それに俺が若し本統にお前の戀する男だつたらかう云ふ俺の本性もお前にとつて決して嬉しくないものぢやないのだからな。だがお前はいくら俺を耻知らずだの色氣狂いだのと云つて輕蔑して見せたつて俺にはお前が實は俺を輕蔑してはゐない。寧ろ内心ある尊敬を以て畏れてゐると云ふことが分つてゐるんだ。お前は銀を錫と見違へる程馬鹿な女ぢやない。だから俺はお前が輕蔑と云ふ言葉を使ふことに對

しては始めから平氣だつた。そして俺はお前の口先の侮辱を甘んじて俺と結び付けることによつてお前の運命に光を點じてやらうと思つたのだ。又思つてゐる。それが俺の義務だとも思へるからな。

女 ほゝ、大層體裁のいゝ義務なこと。押しつけ的で、而も利他的だね。手提げの中から櫛を出し鏡臺の前へ行つて髪を格恰を直す。

男 うむ 俺はお前と同じにエゴイストだ。只お前とちがふ處はお前のは、己が利己にのみ畢つてゐるが、俺の場合では利己は利他となり、利他は利己となる點だ。

女 (なほ化粧し乍ら) いゝえ、妾の云ふのはね、そんな結果に就いて云つてるんぢやないんですよ。貴方が見え透いた利己の動機を持ち乍らそれを如何にも利他的な目的でやつてゐるやうに思はせ振りをする處が可笑しいと云ふんですよ。

男 何が思はせ振りだ。では判きり云はう、俺はこれからお前に對しては徹頭徹尾利己的にやる。俺の都合のいゝやうにばかりやる。そしてお前の自由を束縛する。俺はお前の全部、體も、意志も、運命も、凡て皆俺の所有物にする。無論俺自身の幸福の爲めに！そして毒蛇を幽閉する事は社會の爲めにもいゝのだ。

女 ねえ一寸。失戀とは一體どんなものなの？

男 へむ。お前は中々器用に惡戯を應用する蛇だな。

女 貴方が餘んまり樂天的な顔して虫の好いことばかり云ふから、妾も惡戯がして見度くなるのですよ。一體男と云ふものは女に逢いさへすれば只もう無暗とお前の運命がどうのかうのとえら相な理屈を口にさへしてゐればいゝものと思つてゐるやうね。冗談ぢやないわ。自分一人の運命を背負ふのさへ覺束ないくせに。それと云ふのもあんまり自分の慾望の本心が賤しくつて見共ないもんだから。

男 さうく。それで思ひ出したがお前は何時か俺がこう云ふことを云つた時、それを賛成したことを覚えてゐるか。

女 どんなこと？

男 つまり世の中には人の尻馬に乗るか、流行に浮かされるかして絶えずわやくと騒ぐ事を生命としてゐるモツブと云ふ奴等がある。そう云う奴が女なら女に興味を以て向ふと、口先き丈けではイヤにコケ威しに人の運命を口にしては自分の身にもつかない豪相なことを述べたてるものだ。處でそう云う野次馬は素とく自分自身の肉や血で對象に對つてゐるのでなくて、強者は斯くくの場合にはかくあるべき筈と云ふ借り着の概念で對抗してゐるのだから、其概念と矛盾した對手のはねつけに逢へばさらりとそれから引き擧げて了つて恰かも自分はその女の配遇者となるには少し偉ら過ぎた、あの女は救げられない、俺はあの女を征服した

と云ふやうな顔をして悔む處がない。

女 (あくびをしてトンチンカンに) さう。さう。それで？

男 しかし勿論さう云ふ無責任な浮はついた手合は本統な自分の骨身を以て物に當ることがないから、對手の運命がどうならうと苦しむこともない代りに、又決して本當の戀を経験することもないのだ。で俺がもしそう云つた、ほんとうに蟲の好い樂天的なモツブだつたらだ、半年は愚か、お前に戀を打ち開けて弾ねつけられた始めの一回か二回でもうあつさりとお前を捨て去つてお前を輕蔑しぬいた風を装つたに違いない。しかるに俺はかうして未だお前を對手に恰度カアくとしか啼き方を知らぬ馬鹿な鳥のやうに、同じことを二年餘りも繰り返へして、散々お前に侮辱され乍らも猶ほかつお前に引つかつてゐる。お前の運命に祈りの心を以て貝のやうにしがみついてゐる。其俺の心持の價值が分るかとお前に訊いて

見た時お前は分ると頷いた。それさ。

女 へえ、大變長い白だつたのね。妾は其時々で随分口から出任せを云ふから什んなことを云つたか一々覚えてはゐないわ。處で失戀とはどんなものですよ。

男 ある詩人は失戀は成功した戀よりも甘いものだと言ふやうなことを云つてゐる。しかしそれが甘いか辛いか位のものであればそれは笑つたり涙を流す位の處で済める。それは甘い酒を飲んで誰も額に八の字を寄せるものはなく、辛いものを舐めると自と涙が出る位のものだ。しかし人間全體が頭となく胸となく堪えられない苦しみに破裂し相になるのを怯えなければならぬと云ふやうな心持を本當に經驗する時、それはもう詩的な甘味があると云ふやうな呑氣な餘裕を味つてはゐられない。唯もう無暗と惱ましく苦しい。失戀の味はそんな風だ。

女 たまらないわね。

男 譬へて云ふと今迄青い色で流れて來た川が今度は灰色の川となつて流れるやうなものだ。色は希望が未だある時よりも褪せて陰鬱だが、川は同じやうに流れつづける。失戀で戀の結末が付くものならそれは少しも苦しいものではない。處が失戀が最も悲愴なものである理由はそれが戀の死滅でなくて重傷であり、結末でなくて而も永久の絶望であるからなんだ。(男、涙ぐむ)

問。

女、一寸同情したやうに黙つてゐる。

女 だけどまんざら骨折り損でもないわ。貴方はとに角二週間の間でも可愛い妾を獲たんだから。

男 (泣くやうにせよら笑い) 俺はお前に強いて俺の苦しみを解つて貰はうとは思はないよ。お前は快活であるがいよ。お前はほんとに可愛い奴だ。



女 (笑ひ乍ら) 貴方は何時でも妾にてござるとはまるでそれが唯一の遁げ辭でもあるかのやうに「お前は可愛い、奴だ」とほか云はないのね。貴方も可愛い、好い兒よ。

男 (赤面し乍ら) 何? 可愛い、好い兒だつて?

女 (甘やかすやうに) そんなに嬉しいの?

男 うむ嬉しい。仕うか可愛がつて呉れ。永くく見捨てずにな。

女 (勝ち誇るやうに笑ひ) 先刻の見幕は何處へ行つたんでしやう。

男 帝王に迄なれる人間の素質には又奴隷に迄成り下れる一面があるよ。……しかしお前に逢はない以前の俺に今のこの情けない状を見せたら嘸ぞ驚いたことだろうとは思ふよ。(女の顔を下から見上げ乍ら) それにしても全くお前はそんなに勝ち誇つて見へる時にどうも殊更綺麗なのが奇しい。實際お前の云ふ通り

だ。

女 苦笑す。暫く沈黙。

女 一生帝王であらつしやい。

男 そんなに俺が厭か。そんなら今お前が俺を可愛いと云つたのは嘘だね。……そんなことは勿論分つてゐるが。

女 仕うせ妾達は嘘の吐きつくらしをしてるんだわ。貴方だつて先刻妾が此處へ來てからもう何遍嘘を吐いたでしやう。ですけどね。妾の云ふことは大抵後から云ふこと程はんとらだと思つてゐれば間違ひはないわ。

男 しかし始めほんとうのことを云つておいて後で嘘 吐くこともあるだろ。

女 え、又一度嘘を吐いたなりで放つたらかしておくこともあるし、又一つ一つほんとうのことを云ふこともあるわ。しかしそんなことは……

男 戀人にでも向つた時でなければか。

女 戀人にだつて嘘は吐くわ。其方が却つて本統で親切なことがありますもの。

男 だがほんとお前は戀人を持つてゐるのか。お前は男にとつては仕事が生命で、

女にとつては戀が生命だと云ふ説を輕蔑してゐたね。

女 そう云ふ説を輕蔑する妾には戀が生命としてども、又一生の運命としてどもな

く起つて来るやうな時がないでしやうか。

男 俺にはそう云ふ戀は戀でないと思へるが、しかしまあその男は一體什んな男だ。そんなことを今更聞いたつて始まらないとは思ふが、何だかそれを聞くことが俺の義務でどもあるやうな氣がするのだ。

女 又義務が始つた。まあ當てゝ御覽なさい、什んな男だか。

風の音烈しくなり、窓より吹き込んでランプを消し相にする。男起つて窓をしめ又座に就

く。

男 大抵分つてゐるさ。要するに其男は正直と云ふ點で俺に似てゐるが、俺よりもずつと愚劣で、腰抜けで、お前の云ふたり次第になる、一言で云へば極く平凡な金持の息子位の處だらう。

女 (冷笑的に) よく當ること。

男 ぢや、矢つ張り當つてゐるんだ。

女 (笑ひ乍ら) 何れ後で會つた時に分るでしようよ。

男 なんだ。其男が後で此處へやつて来るのか。

女 えゝ、もう暫くたつと来てよ。

男 ふむ、お前は先刻からコートを脱がすにゐて、手提げを持つて、今夜から俺と別れやうと云ふのだな。

女 今頃それに気が付いたの？

男 今頃それが分つたのなら何も俺は扉の錠杯を卸しはしなかつたさ。しかしそんなら何故お前は今夜態々此處へ歸つて來たのだ。俺には實はそれが先刻から不思議でならなかつたのだ。お前が俺に別れを宣告しに來た場合には俺が如何なる手段に訴へてもお前を手離すまいとする位のことが出うしてお前に分らなかつたんだ。それは好んで係蹄わなにかゝりに來たと同じことだ。

女 だから貴方は什の位自分が暴君になれるか試めしにやつて見ればいゝぢやありませんか。

問。

男 うむ、其暴君と云ふことに就いて今俺は一言云ふ度いと思つてゐたのだ。實は俺は生れ付き暴君ぢやない。暴君と云ふのはお前のやうに自分が其上に專横を恣

にすることの出来るやうな自分以下の力のない人間をばかり對手にして樂む奴のことを云ふのだ。今お前が戀人と云ふ名を使つた其男に對するお前の關係杯が即ちそれだ。處が俺のやうな人間は始終自分と對等な力のある人間か、自分以上の力をばかり對手にして進んで行く。だからそう云ふ人間は征服はするが暴君にはならない。征服がし度い癖に其力のない弱者や、身分相應な欲望を持て餘してゐる怠け者に限つて暴君になるものだ。

女 (嫌な顔をする) 兎に角貴方は妾に對して暴君にもなれず、かと云つて征服も猶更出來ないとなると見すゝ妾がその男と一緒に出て行くのを見送るより外に仕方がなくなつた譯だわね。

男 しかし此場合は止むを得ない。俺はどんな手段に訴へてもお前を此處に引き止めるさ。

女 そんなことが貴方の力で出来るもんですか。

男 いや出来る。だがお前は一體何の心算で態々此處へ歸つて來たのだ。まさか俺を  
擲掬いに歸つて來ると云ふ勇氣もお前にはない筈だし、それに縦令お前が行衛知  
れずになつたとした處でまさか俺がそれを警察沙汰に上のほしもしまいぢやないか。

女 妾が此處へ今夜歸つて來たのには簡単な理由しかないわ。それは兎も角も先づ  
貴方との片をキツパリ付けておいた方がいゝと思つたのと、それから貴方に妾の  
男を明らかに紹き介はして、なるほど之が本當の運命と云ふものだ。俺の無理は  
利かない筈だつたと貴方に諦らめさせる爲めと、も一つには此手提げを取りに來  
たんです。それに荷物の仕末もしなければならぬし。

男 それ丈何か。

女 そうね。もしあれば貴方をもう一目見ておき度かつた位の處でしょう。

男 怖わいもの見度さと云ふ風にか。しかし俺にはお前の所謂情夫なるものがお前  
にとつて實は何でもない只の人間で、唯此場限りの俺との恐ろしい離別の申し立  
てにする、つまり間に合はせの緩衝機バッファとしての傭人に過ぎぬと云ふことが分つて  
來た。その男はお前には戀人でも何でもない。俺の察する處によると、多分主人  
からの借り着でも着込んだBか〇の家の給仕か執事位のものだらう。

女 (思はず顔を赭らめ) 恐らくそうでしやう。

男 お前が晝の間にでもBか〇を通して今晚十時頃に其男が此處へ來るやうな手筈  
にしておいたんだ。(間) いざとなると何と云つたつて女と云ふものは弱いものだ。  
ある後ろ楯での力なしにかう云ふ場合に自分一人では臨み得ないのだ。そうして  
其後ろ楯となるものは何時も男に決まつてゐる。……そうだ。Bのやうな可厭  
な奴は使はれてゐる小使さへも時として只男であると云ふ丈けで其後ろ楯の役が

務まるのだからな。俺の云ふことはよく的るだらう。

女 勿論其男は妾にとつて戀人でも何でもありません。又必ずしも何かである必要はありません。妾に縦令本統の戀人があつたとしたつて妾は今此場合に其男に此處へ來るやうには頼まなかつたでしょう。其必要がないからですわ。何故つて妾は貴方の妻になることを欲しないんだから貴方を捨てるにはそれ丈けの理由で充分ぢやありませんか。そして今此貴方と差し向いの場合に一番妾に入り用なものは何でしやう。つまる處只貴方の方の萬一の暴力に備へる爲めの武力と云つたやうなものぢやないでしやうか。妾は權利としては自分一己で充分貴方に對抗出来るけれど、暴力では貴方に叶はないから。ですからそれに備へるには〇の處の小使で充分なのです。丁度荷作りの世話も頼む事が出來ますしね。

男 (失望しつゝ憤慨して) ふむ。其奴に籠の穴のつつかへ棒をさせるか。

女 まあそう云ふ譯よ。貴方の暴力では、へし折ることの出來ない丈けの頑丈なつつかへ棒を籠の穴にかつておきさへすれば、何も妾が自身に鐵の翼なんぞ持つてゐる必要はない譯でしよ。少くともこんな野暮な場合に用ふる意味に於てはね。妾はこの儘で樂にその穴から出て行きますよ。

男 (怒つて) 馬鹿! 何と云ふ簡單な獸だ、お前は。

女 (冷やかに) いくら貴方が青筋を立て、憤慨したつてももう無駄よ。その男は至つてお芽出度いんですが力は貴方よりも強相だわ。ほんとにこんなつつかへ棒なんぞの入要な時には男は重寶なものですよ。

男 (むしゃくしゃして) あゝ俺はまあ何と云ふ馬鹿だつたらう。こんな低級な馬鹿女に眼が眩んだとは。よくよくお前には俺が解らないと見えるな。

女 だからお互に失望して輕蔑し合つて別れて了へばそれが一番いゝじやありません

んか。

男 馬鹿。そう簡単に行くものか。お前は、そうさせようさせようと態と努めてゐる。だが俺がお前に失望し、お前を輕蔑してゐるのは今に始まつた事ぢやないんだ。

女 御同様です。

男 嘘を吐くな。お前は俺を輕蔑し度がつて乍ら事實出來ない。それがお前には強腹なんだ。そしてお前は俺に飽きて來たと云ふよりも俺から妙に鞏迫と引力を感じて來たが爲めに、負けず嫌いなお前は無理に俺のお前に對するまじめな戀を茶番に弄んで、凱歌を擧げる事にしやうと企らむんだ。しかしかう萬事判きりして了ふと今來やうとしてゐる男の役も恐ろしく間の抜けたものになつて了つた譯だな。

女 什うせ間拔けな男が間拔けな役を演じるんですからそう間が抜けても見えないでしやうよ。それにしてももう貴方が妾の側にゐられるのは僅か數分間の間です。お別れに葡萄酒でも取り寄せて飲みまじやうか。

男 へん。態々扉を開けて頼まなくつても彼處に未だ少し残つてゐる。(葡萄酒の罇と二つのコップを取つて來て注いで飲む。)もう俺と飲むのはいやなのかい。

女 お別れに飲むわ。貴方の幸福の爲めに。(飲む)

男 ふむ。未來永劫の幸福の爲めにか。おい、此酒には毒が仕込んであるんだぞ。

女 (流石に色をなし、一寸立ち上つて男を睨み)馬鹿被仰い！ 貴方に心中なんぞ出來るもんですか。

男 とした處で其男が來る前に俺がお前を殺しちまつたらどうだ。

女 (腹むで)貴方も殺される丈けの話だわ。

男 なあに殺されるとは限らないさ。

女 貴方は妾にこんなに侮辱されて捨てられても死に度くはないの？

男 馬鹿な！ 誰が貴様の爲めになんぞ死ぬものか。しかしお前は俺から見捨てら

れ、ば死んだも同様だ。俺を捨て、貴様は一體仕うする心算なのだ。

女 (諧謔的に冷やかに) 貴方の所謂墮落に飛び込んで行く丈けの話だわ。

男 (頭をふり) え、え。そんなことをかりそめにも俺の前で云つて呉れるな！ そんなことを聞くと俺の胸は裂けるやうだ。

男 起ち上り室の中を歩き廻る。其眼には涙が輝いてゐる。やゝ長き間。

女 (落ち付いて懇ろに) お聴きなさい。妾はこう思ふの。もし釣合と云ふ物が何よりの戀の條件となるものなら貴方と妾とは恐らく似合いの夫婦になれたでしやう。しかし結婚にとつては釣合は問題でなくて、唯調和と云ふものが條件です。妾と

貴方とは或は釣り合つた二人だつたかも知れません。しかし調和する二人ではありませんでした。ですから貴方が妾の方にこゝんで来れば来る程妾は自づと後ろに振り返るやうになつたのです。しかしそれは妾の意志でした譯ではありませ

男 實際だ。恰度俺がお前の方にのしかゝつて行つたのが俺の意志でなくて運命の意志であつたのと同じだ。(女に近い椅子に腰を卸し愛の溢れた眼を以つて) 全く俺はもう少しお前が俺と調和出来る女だと思つてゐた。しかしもう今の俺にとつてお前と俺とが何の位調和するかしないか抔と云ふことは問題でなくなつてゐる。俺はお前と云ふものに眼が眩んで何が何だか分らなくなつてゐる。そしてお前はもう只失ふことの出来ない俺にとつての絶對的必要物としか見えない。しかし不調和なら不調和でもいゝ。その不調和から更に大きな調和を生み出さうではないか。俺

は梵鐘の響きの中に消されて了ふやうな鈴の音の調和位で満足出来る男ではない。俺はお前がそんな影の薄い女でなかつたればこそお前を戀しもしたのだ。俺が自分の鐘を力強く突けばお前もお前の鐘を負けずにたゞき鳴らす。だから二人の響の混合は一寸騒音のやうに聞こえる。しかしその音がやがて何時しか相共鳴する和音（ハーモニー）となる時その和音は如何なる和音よりも大きく、美しく、そして深い音響として全世界に鳴り響くだらう。俺はそう云ふ調和を希望してゐる。お前も仕うかそれを希望しては呉れないか。

女（笑ひ乍ら）希望するかも知れません。

男 え？ 串戯は止してお呉れ。お前は實に美しい力、力強い美の權化だ。

女（甘やかすやうに笑ひ乍ら自分の膝をたゞき）此處に突つ俯しなさいな。

男、女の膝に突俯し、その胸に抱き付いて黙禱す。男の體わなくと顔ふ。其間に女右手

を後ろの方へ延ばし、男の袂の中より鍵を取り出す。男程なくして頭を擡げ、それに氣が附く。

男 取つたな。

女 え、取つてよ。（間）是非妾が取つておく必要も無いけれど又後で餘計な面倒が起ると厄介だから。

男（暫くジツと女の顔を凝視めた後で）仕うしてもお前は俺を捨てる氣かね。

女頷く。

男 しかしそれにしても何も今夜に限つた譯ではないだらうぢやないか。此吹雪の夜更けに。

女 いくら吹雪が強くつても、夜明けになつても、妾は一旦思い立つた事は必ず通します。それにもうこゝ迄話が進んぢまつたからには妾は猶更可厭な思いをして



此家に止まつてゐる氣にはなれません。妾はもう一刻も茲に居ることは可厭です。

男 いやだと云つた處で胎の中の子供はどうするんだい。お前はその子供から此父を捨てる事の承諾を得たのかい。

女 (憎くくし氣に) まあ、何と云ふ耻知らずでせう！ 自分で約束を破つておいて人をだまぐらかして、強姦罪を犯し乍ら！ 貴方こそ其子供の承諾を得て此母の操を破つたんですかよ！

男 何、お前の操だつて？ ふむ、そんな事を云ふと胎の子供が泣き乍ら笑ふぜ。姦通罪と、強姦罪とぢや大した違いもなささうだが。

女 どうせ皆男の仕業です。だから誰でも男がその連帯の責任を負へばいゝのですよ。

男 だからそれは俺が背負ふよ。たとへそれが俺の子でないからつて、そんな事は

覺悟の前の話だ。ねえ、俺に背負はせてくれ！ お前とお前の子供との運命を！

女 本當に貴方はいゝ阿父さんでせうね。妾も妾の子供丈けには貴方のやうな人を阿父さんに持たせ度いと思ふわ。だつて事實貴方がお父さんなんだから。(急に焦れた相にモジ々々して) それやさうとどうしたと云ふんだらう。もう來相なものなのに。

問。

男 (嘆息して) あゝ何だか俺は苦しい夢にでも魔されてゐるやうだ。

女 (嘲笑つて) 苦しい夢と云ふよりも今迄貴方が見てゐた氣樂な夢が覺めた苦しさでしやう。

男 そうかも知れぬ。

女 かう思つて御覽なさい。妾と云ふ人間は貴方が勝手に空に描いた幻影に過ぎな

いので、實在の人間ではないと云ふ風に。つまり妾と云ふものに貴方は逢はなかつたものとして考へるのよ。妾も貴方の事はすっかり忘れて了ひますから。

男 馬鹿な。お前にだつて俺の事が忘れられるものか、人間は一寸した詰らぬ事さへ割りによく覺へてゐるもんだ。俺はお前に遭つたと云ふ不幸な運命の事實を胡魔化す事は出来ない。それが出来るなら何で俺はこんなに苦しむものか。(歩き廻り乍ら)だが又始まつたと云はずに聞いて呉れ。これは先刻から氣が付いてゐたことだが一體俺達は非常に馬鹿なことに煩はされてゐると思ふ。それは何かと云ふに言葉遣いだ。俺達は口癖のやうにやれ暴君とか、奴隸とか、牢獄とか、囚人とか、掠奪とか、そんな普通の夫婦が餘り遣はない突飛な言葉を濫用し過ぎる。それが爲めに餘計な物議や悶着を醸してゐる。馬鹿な話だ。之からは一切そんな不穩な言葉遣いから來るつまらぬ紛擾を避けて、平和に暮さうぢやないか。

女 (嘲笑つて)何もかも今迄の過去を水に流してね。

男 うむ、そうだ。

女 (圖に乗つて)用心なさいよ。そろ／＼貴方はお目出度くなつて來てゐますからね。一體そんなことは口に出して云はなくなつて習慣的に胸の中でそう思つてゐれば同じことぢやありませんか。

男 いや少しは異ふ。少くとも悶着が馬鹿らしく大袈裟に發展しずには濟む。

女 まあお聞きなさい。貴方が苦しい頭を捻くつて色々な説を根氣よく搾り出す心持には妾同情出来るの。しかし凡て貴方の云ふことは妾にはもうどれもこれも五十歩百歩にしか響かないんですよ。恰度中心の柱が折れた爲めに大きな屋根が崩れ落ちやうとしてゐる下へ何本も小さな棒杭を樹てゝ見る位にしかね。

男 (腹立たしく)ぢや俺はも一度頼む。お前は今迄通りにして朝から晩迄此處を明け

放しにしてお前の好きな處を勝手に飛び歩つてゐて構はないから仕うか責めて俺と一緒に住むこと丈けは止さずゐて呉れることを。俺はお前の云ふなり次第になるよ。

女 先刻貴方は妾に始め當分の間でも同棲して見てくれと頼んだのは、云ふ迄もなく俺の口實ではなかつたつて云いましたつね。貴方の云ふ事に何の信用がおけるでせう。

男 うむ。俺が悪かつた。實にいけないかつた。しかし俺があゝ云ふ事を云ふ自然な心持ちをよく知つてながら態とそれを責めて見たりするお前も餘りよくない。一體仕うしてお前はそう俺を虐めることが好きなんだ。

女 貴方が嫌いだからよ。  
男 何故嫌いだ。

女 妾はどうしても貴方を好けないのに、貴方は好く事を強ゐるからよ。  
男 俺がいつ強ゐた。

女 ぢや貴方と同棲してゐる事がそれを強ゐるのでせう。何方にしたつて同じ事だわ。だけど貴方もしつこいのね。なぜもういゝ加減に勝手にしろと云はないの？  
男 誰がそんな事を云ふもんか！

女 云い度くも云へないんでせう。(勝ち誇るやうに)でも本當はね、妾も随分貴方を好かうとは努めたのよ。貴方のやうな人を本當に愛する事が出来て夫に持てたらどんなに幸だらうと思つてね。其事は妾お別れに際して貴方に白狀しておくわ。全く貴方のやうな人を愛せないのは自分が悪いからだとも思つたわ。そしていつそ貴方と同棲して見やうと決心したのだけ。一緒に棲んで見たら或は愛情が起るかと思つて。處がそんな無理をした結果事實は反對になほわなくなつて了つたのだ

わ。

男 あゝお前は矢つ張り善い人間なんだ。只反抗心が強過ぎる丈けだ。

女 貴方は日外妾いっせやに無頓着は何よりいけない。責めて嫌はれた方が未だましだと云つたことがあるわね。

男 (つつり)うむ。……それが仕うしたと云ふんだ。

女 (だんぐ扉の方へ寄り乍ら) 處が今になつて見ると妾が貴方に冷淡であつた頃のこと未だ餘つ程名残り惜しいでしやうと云ふの。

男 もう何でもいゝんだ。お前、俺を捨てさへしなけれや。

女 人に物を頼む時は頭を下げるものよ。

男 うむ。下げる。お前に對してぢやない。お前との運命の恩に對して。お前見たいな女をそれ程大恩人たらしめた俺自身の力に對して。(頭を下げる)

女 そんなら一人になつたらいゝぢやありませんか。妾だつて貴方から離れるのは何も貴方の爲めぢやないんだから。

男 どうしても駄目か！ こんなに頭を下げて。

女 駄目よ。そんな頼み方ぢや。

男 此畜生奴！ (いきなり女を抱いて嘯むやうに接吻する)

——女思はず男の横顔を叩く。

女 (少し悪い事をしたと云ふ風に赤面し乍ら) 獸物！

男 悪かつた！ 俺が謝まる！ 俺は馬鹿だよ。あゝ、馬鹿だ／＼！

男、狂い乍ら室の中を狂い廻り、椅子にぶつ倒れる。其際に女扉の錠を外す。男慌て、女を室の中央に曳きずり戻す。此時下の方で戸口の鈴鳴る。

女 あゝ来た。もう此れきりだ。

男 誰が来たつて俺は其奴を此室に入れはしない。此室は俺の室だ。そしてお前は俺のものだ。俺の道具だ。

女 (平然と鍵を見せびらかし)之がほしいでしょ! 返へして上げませうか。

男、不意に手を延ばしてそれを引つたくらうとする。女巧みにそれを引つ込ます。

男 馬鹿! 巫山戯たまねを! やがるな! (少時くして) 一體何處へ行かうてんだ。お前は宿無しぢやないか!

女 (冷笑的に) そんなことは一切心配御無用。妾は晝間飛び歩いゐてる間を色々な役に立てることが出来ないでしやうか。又妾が何處へ行くかそんなことを貴方に知らせる馬鹿が何處にあるもんですか。

男 一層行くなら千里も遠くへ行け!

女 大きにお世話様 貴方の爲めに態々轉地を企てる位には妾も貴方に拘泥してゐ

なくちや濟まないとは思ふわ。けれど妾は矢つ張り此都會の中にうろついてゐて、之からも又何度か貴方に會ふやうなことがあるでしやうよ。しかしそれが可厭なら一層此室から出ずにゐらつしやい。

男、突然、葡萄酒のコップを女にたゞきつける。女、悲鳴を擧げて身をかはず。コップ壁に當つて碎ける。此時扉あく。一人の大きな男、〇、二重廻はしを着黒いソフトの帽子を阿彌陀に冠り、両手をカクシに突込んだ儘傲然と背り身に突つ立つてゐる。而も顔には天狗か鬼のやうな面を被つてゐる。

女 それを見ると噴き出す。

女 まあ驚いた。いたづらもいゝ加減になさいよ。びつくりするぢやないの。

男 (思はず葡萄酒の盞を取り身構へして) 馬鹿!

〇 (面を脱いで、カクシに押し込み乍ら) はゝ。馬鹿とは貴様のこつた。

女 (人違ひであつた事に驚いて) まあ、誰かと思つたら貴方なの! (急に傍へ寄り添ふ)  
〇 驚いたらう。賣女奴。貴様の云ふこつたから當にならねえと思つて御自身でお  
越しになつたんだ。(男に) おい、貴様もよくくお芽出てえ野郎だな。こんな女  
に引つかゝりやがつて泣いたり、喚いたりしやがつてよ。何てえ状だ。こんな鼻  
つ紙見てえなやくさ阿魔によ。もうちつとは貴様も趣味のいゝ奴かと思つたら。  
低級此上なしだ。

男 (度胸を抜かれたやうに暫く啞然と〇を睨んでゐたが、葡萄酒の盞を手から落して 俺は何  
もかも知りすぎてゐるんだ。俺が馬鹿だと云ふ事も、戀は理屈ぢやないと云ふ事も。  
けれど仕方がないんだ。(舌打して) だがそんな事は俺の云ふこつた。貴様なんぞ  
がそんな不埒な事を云やがると、其儘にしちやおかねえぞ! (飛びかゝらうとする)  
〇 (軽く突き返へし乍ら) どつこい。(男よろける) はゝゝ。どうしたく。しつかり

しねえ、蚊の脛先生。其儘にしちやおかねえは恐ろしい。(女を顧み) どうだ女、  
こいつと一緒になつてやらねえか。此奴位なもんだぜ。此三千世界でお前なんぞ  
に惚れてくれるのは。

女 いやです。くゞく!

〇 いやですだと? ふむ。身の程も知らねえで、彼處に鏡があるぢやねえか。あ  
れで面でも見直して大きな事を云いやがれ。

女 身の程は知つてゐます。けれどいやです。貴方の傍を離れるのは!

〇 へ、有り難え、仕幸だ。運命の神つて奴は随分いたづらをしやがるなア。俺ん  
處なんぞへ來やがつたらそれこそ奴隷同様だぞ。お前が今迄此可哀相な男をひど  
い目にあはしてゐやがつた罰が當る許りだ。

女 (すつかり前とは別人のやうに降参した體で) それでもかまひません。貴方の傍にさ

へゐられれば、半屋のやうな處でも。

男 あゝ、何と云ふ事だ。(呻る)

女 こんな處を見せて随分皮肉だわね。貴方には同情するわ。だけど仕方がないのですもの。いつそ自殺でもなさいよ。

男 いやだ!

〇 はゝゝ。いゝ喜劇だな。恰度いゝや。女優の拂底の折柄だ。手前見てえなすべだでも馬の足位は務まるだらう。買つてやら!

男 もう我慢出来ない! そんな事させるもんか。俺はどこ迄もお前に喰つてつて離れないからさう思へ。お前のゐる處には俺はきつとついてつてやる。(〇に)君は歸つてくれ玉へ!

〇 うむ。歸らう。俺はどうだつていゝんだ。こんな阿魔の一匹や二匹。君にやり

度いのは山々だが。

女 その人を抑えてゝ下さい! (飛鳥の如く戸口から走り去る)

男、絶叫し乍ら追ひかけやうとする。〇、軽く突きのける

〇 はゝゝ。諦めろ。自分の力の限りを知れ。もう同じ事だよ。馬鹿なこつた。(静かに去る)

男、又「オイ待つてくれ!」と叫び乍ら其後を追ふ。階子段をけたゝましく駆け降りる音風の音に交つて聞こゆ。風の爲めにランプ消える。

幕

一九一四、一、七、作  
一九二二、一、改訂

孔子の歸國（一幕劇）

禁無斷興行



人 物

孔子

顔回

子貢 その弟子

子路

宋國の攝政、陽策沈

衛國の公妃、南子

衛國の大臣、陳文子

其他部下の兵十數名

時 代

支那周末春秋時代

森の中の空地。秋。

左手に孔子、粗末な机に凭りかゝり、うとくとしてゐる。其の傍に大木の幹に憑と、長い杖とが立てかけてある。

右手には弟子三人、焚き火にあたり乍ら、ひそく話をしてゐる。孔子は丁度彼等の方へ背を向けてゐる。

子路 (孔子の方を見、囁くやうに子貢に云ふ。) 夫子は祈つてでも居らつしやるのかな。それとも又何か考え込んでゐらつしやるのかな。

子貢 (矢張り一寸孔子の方を見て) 左様さ。何方とも分らないね。だが先刻からあの

孔子の歸國

儘でゐらつしやる處を見ると、考えてゐらつしやるのでも、祈つて居らつしやるのでもないかも知れない。大方眠つて居らつしやるのだらう。

子路 さうかな。しかし夫子は時々僕らを安心させる爲めに態と眠つたやうな風をなさるのではないかと思ふ事があるよ。

子貢 は、それは少し君の察しがよ過ぎるかも知れない。尤も夫子が僕らをおいたはりになり過ぎるやうに僕らに思へるのは事實だ。例へば夫子は音楽が大好きで、唱歌は吾々を邪念妄想から救ひ出すと云つて居らつしやる位だが、殊に今のやうな遭難の場合には猶ほの事その必要をお感じになると見へて、昨今は又殊の外度々、而も聲高くお歌ひになる事は僕等の氣がついてゐる通りだが、どうも僕はこのお聲を聞くと、腹の底から身命を投げ出し度いやうな一種の勇氣をそゝられるもするが、又何とも云へぬ悲壯な涙ぐむやうな心地になつて来る。あんまりおい

たはりのお心が分るものだからな。

子路 それもさうだが、僕は又何だか怖ろしいやうな氣もして來るよ。云はゞ僕らの運命の晴雨計同然な夫子があつたやうにお歌ひになる事が多くなればなる程それはつまり僕らの運の最期が近づいた事をお告げになつてゐるやうな氣がするのでね。素よりさう云つたとて、夫子に捧げてある此身を氣遣ふ譯ではないが。

顔回 はゝ。私にはそんな風には聽こえないがな。吾々の運命の危い事、不安である事は今更夫子にお告げ頂く迄もない事だ。むしろ、吾々の困窮が一日々々と迫つて來れば來る程あの即興のお歌のいよゝ美しくなつて行く事、あのお聲の益々力強くなつて行く事はどうだ。外界と物質の迫害に對する心靈の朗かな凱歌、人間の邪惡に對する正義の凱歌。私はあの崇高なお歌、あの朗かなお聲を伺ふと、實に云ひやうのない力と、勝利とを感じないではゐられない。そしていよゝ夫子の前

に跪き度くなる。もし吾々の最後が吾々の前に来たならば夫子のお歌は更に一層美しくなり、一層畏るべきものになるだらう。夫子は有り難い。夫子は畏ろしい。

子路 顔回さん。流石は貴方の言葉だ。僕らは先輩たる貴方の前に恥しく思ひます。もし吾々が皆貴方のやうだつたら夫子はさぞ御幸福で、お氣強い事だらうに。

顔回 そんな事を云はれるとどうやら喧嘩腰な嫌味を云はれてゐる様な氣がする。そして素よりそんな事のあらう筈もない君が私に嫉妬でもしてゐるやうに君の言葉を取らなくちやならなくなる。だからかりそめにも吾々の間でそんな烏許がましい冗談は口にしないものさ。夫子から見れば吾々は皆同じ麓の石ころで、どれも違ひないのは無論の事ぢやあるが、然し、君は若く、美しく、そして善良な勇氣に充ちてゐるのだ。夫子が毎もどんなに君を褒めて愛しておゐでになるか、それは此全身誠と、知慧とに充ちてゐるもう一人の夫子の愛弟、子貢がよく知つて

ゐる通りだ。が、一人齡甲斐もないのは此私だ。恥しい事に、私は未だ此齡になりながら如何なる場合にも天命を楽しむでゐると云ふ事が出来ない。つまり未だ楽しむには徳が足りないのだ。其證據には私は随分寢不足で、又眠る時間もあり乍らどうも心がゆつたりとしないで安眠が出来ない。

子路 だつてあの何を仕出かすか分らない陳蔡ちんさいの奴らに取り圍まれて、かうして山中に籠城してゐる今の矢先きに僕らがさう安閑と枕を高くしてゐられる筈もなからうぢやありませんか。之がもし夫子のお伴でなく、吾々丈けの旅だつたら、それや吾々だつて――

子貢 安心さ。頼むだつて誰も取り巻いたり、掴まへたりして呉れ手はないからね。

子路 はゝゝ。まあそんな譯だから聖人の警護の大任に當つてゐる吾々が夫子自らのやうにゆつたりと居眠りをしてゐる譯に行かないのも當然ではありませんか。

え、顔回さん。

子貢 それに腹はベコキヤだし……。

顔回 (笑を含んで制し乍ら) あんまり大きな聲を出しなさるな。折角うとくとして居らつしやるのだ。

子路 さうく。夫子のお寝みを尊重しなければならなかつたな。——どれ、お風邪でも召さないやうに一つ上被をおかけして來やうか。(立ち上る)

子貢 笈の中には書物の外何もないよ。たつた一つ残つてゐた上被は此間の乞食に呉れて了つたからね。これをお掛けして來玉へ。(自分の上被を脱がうとする)

子路 いや。君のよりは僕の上被の方が温いよ。物がいゝからね。それに僕が一番若いし、一番丈夫なのだ。僕が上被一枚位脱いだつて何も僕がとりわけ忠義な奴だ杯と思ひになる氣遣ひはないから安心だ。夫子がそんな事で僕らの間にケツ

メをおつけになるやうだつたら、上被を脱ぐ僕よりは寧ろ僕にさうさせて見てゐる君達の方になほ満足なさるにちがひない。(自分の上被をぬいで孔子に被せる)本當にどうやらお睡りになつたらしい。何と云ふ安らかなお顔付きだらうなア。なんぼ吾々が護衛してゐるからとは云ひ乍ら、狼に取り巻かれてゐるも同然な此危険な矢先きに、まるで風の無い月夜の高い雲のやうに悠々と澄みきつて居らつしやる此お寝顔。どうも此お顔を見ては吾々のさはついた、見つ共ない心根迄が自づと恥と誇りとの自覺を取り戻して、安らかに晴々としなない譯に行かない。パツチリとお開きになつてゐるお眼が美しく、嚴かで、仁けに充ちて居らつしやるやうに、此お閉じになつたお眼の氣高い床しさも亦格別だ。實に起きて居らつしやる時は吾々に力を與へ、休んでゐらつしやる時は吾々に平安を與へて下さると云ふ譯だ。

子貢 本當にな。痛快と云ふか、何と云ふか、盜賊の手に運命を任せてゐる夫子は

安らかにお眠りになり、夫子の御命を握つてゐる積りの盜賊共はもしや夫子の御仁徳に引きつけられてウツカリ自分の役目を裏切りはしないかと云ふ虞れの爲めに耳に栓をかつてゐると云ふ始末だ。——だが、子路。力も安らかさも見へないのは君のその腰つきだ。まるで酒にでも酔つてゐるやうぢやないか。どうもそのフラ／＼した腰つきではどうやら此大任を背負ひ通せ相にも見えないが。

子路 いや、お恥しい譯だが、正直な話、僕は腹が減り切つてゐるんで、之から先き何時迄此絶食生活がつゞくのかと思ふと、つい氣が弱くなつて、腰の邊迄が何となく力が抜けて来るやうでね。

子貢 はゝ。其代り夜逃げも出来ないから安心だらう。

子路 はゝ。なに、かう見へたつて未だいざと云ふ時になれや案外剛毅な處をお目にかける自信はあるがね。だが、君は人の事を笑ふが、あの番卒達に賂をつかつ

て米を仕入れて來た者は君ぢやなかつたかね。

子貢 大きに拙者だ。君との合議の上でね。はゝ。なに、番卒達自身は別段此方に恨みのあらう譯もないのだから、金さへ持つて行きや幾らでも喜んで取り替へてくれるさ。夫子だつて、いくらか吾々に對するつき合ひの氣味もおありになつたのだらうが、その交換を敢てお咎めになるやうな融通の利かない聖人ではないからな。御自分でも二三杯はたつぷりおかへになつた位だ。——どうだね。君の財布は。

子路 何だ、又やる氣なのか。驚くな。

子貢 なに、君の爲めにさ。友達のフラ／＼してゐる腰つきに同情して自分が發頭人と云ふ籤を引いてやらうといふ迄だ。——いくらあるね。

子路 一錢位は未だあるかな。

子貢 一錢では少し心細いな。顔回さん。貴方は不賛成ですかね。

顔回 賛成したくも一文なしだ。さう云ふ君自身の財布はどうだね。

子貢 腹と同じだ。減らずにゐるものは口許りだ。

顔回 はゝ。まあ口が減らずにゐる間は大丈夫だ。口も碌に利けないやうになつたら其時は又其時だが、少しでも辛棒の出来る間はなるべくなら氣持ちのよくない交換は避けやうぢやないか。苟も夫子のお伴として餘り飯の前にガツ々とした見苦しきも見せ度くはないからね。何も外見を飾るのではないが、他の迫害に屈しないのと同じに、胃の腑の迫害にも吾々が人一倍の抵抗力を示す事が出来ないのは少し恥辱な話だ。どんな経験だつて私共には必要なのだから、飢えと云ふものの實際の苦味も人一倍に味つて、明日と云はず今日の生存の不安をしみじみ嘗めて見るのも一つの得だ。つまりそりや私共の信仰と、精神の強みを表はす何より

固い保證にもなる譯だからね。自分により深い経験がありやどんな不幸者に逢つたつて氣おくれや、遠慮は要らない。どんな場合にも確固たる威信を以てドシヤ々本當の事を云へるわけだ。親身の間では眞劍の問題にも多少の冗談を交へて語るのが却つて床しくもあるのだが、私が今急にこんな分りきつた事を鹿爪らしく云つたからつて君達は別に氣を悪くはしないだらう。と云ふのは事實それが今では或る程度迄眞劍の問題になつて來てゐるのだからね。

子路 何で氣を悪く抔するのですか。僕らは今冗談と眞劍の境目であんな事も云つて見たのですが、何、僕だつてまだ二日や三日は確かなもんです。夫子御自身があんなに歌を歌つて元氣よくしてゐらつしやるのにどうして僕らがさうヘコタレてゐられませう。僕は信じますよ。天は夫子を餓死させはしない。人間は聖人を餓死させはしないと。伯夷叔齊は首陽山で餓死しましたがあれは自らそれを潔

しとしたのでもあるし、又彼等は決して孔夫子のやうな聖人でもなかつたので  
す。もし假りに夫子が首陽にお籠りになつたとしたら、僕は固く信じますよ。天は  
決して夫子を餓死させはしなかつたであらうと。

子貢 子路。僕はむしろ反對にかう云ふね。伯夷叔齊は聖人でなかつたればこそ餓  
死で済んだが、孔夫子は聖人だから殺されるかも知れないと。それに第一孔夫子  
だつたらあんな山にお籠りになる筈はない。何處迄も此世に出やう！となさる  
だらう。だから人は否でも夫子の存在に知らぬふりをする事が出来ない。つい問  
題にしなくてはならなくなる。それが厭だから奴等は劍を抜き兼ねない。

顔回 君達の云ふ事は兩方共本當だ。兩方共事實だ。確かに人間は當てにならない。  
だが人間が當てにならないものだからと云つて、私共は自分の使命を腑甲斐ない  
ものだと感じない。矢張りそれが此世の役にも立ち、人の望みにも應じてゐるも

のだと云ふ事を信じてゐるのだ。して見れば私達は矢張り人間を信じてゐると云  
ふ事にもなるのです。

子貢 それはさうです。しかし餘り人間の馬鹿々々しい腑甲斐なさ許りを見ると、  
未だ信仰の浅い僕などには、今の世の中を相手に何十年こんな命がけの辛苦艱難  
を敢てして遊説して見た處が、結局唯勿體ない無駄骨だと云ふ氣がどうもして來  
るのですよ。何しろ餘り懸隔が甚し過ぎるのですからね。一體夫子は吾々が運よ  
く此處を抜け出られたとして、それから先き未だ何處へお入でにならうと云ふお  
つもりなのでせう。

顔回 未だ宋と衛との二國には一度も足をお踏み入れになつた事が無いと云ふので  
此二つの中何方かへ行つて御覽になるおつもりらしい。

子貢。(頭をふる) ふむ。又足の裏のママを増やす位は厭はないが、又あのお悲しみ



を濃くする丈けが關の山かと思ふと何だかおいとしくつて此方迄悲しくなつて來る。——あゝ、併し僕は疲れた頭を少しつかつた故かどうやら眠むくなつて來た。詰らぬ事を考えてクヨクヨするより御免を蒙つて横になつた方がよさ相だ。(孔子の方に向つて黙禮し、其方に頭をむけて横になる。)

子路 顔回さん。貴方も一休みなすつてはどうです。休める時に休むでおゝきなさい。僕が見張をしてゐますから。

顔回 君に許りそんなに上被をぬがせたり、番をさせたりしちや相濟まない。君こそ休息しちやどうだ。

子路 何、僕はちつとも眠むくないのです。どうせ起きてゐるのですから焚木でも拾つてゐますよ。貴方は齡を取つてゐるんだから少しは體を休めなくてははいけませんよ。

顔回 それぢや濟まないが一寸休ませて貰ひませうか。どうせ眠れもしないでせうが。

子路 安心してゆつくりお休みなさい。

顔回も孔子の方を向いて禮拜し、其方を頭に横になる。子路、暫く其邊を歩き落葉や薪を拾ひ、ふと又孔子の寢姿に眼をとめてじつと見てゐる中涙ぐむ。急に跪いて孔子の衣に接吻する。小鳥の聲が聞こえる。子路、立ち上つて暫くその囁りに耳を澄まし、やがて薪を焚き火に加へる。消えかゝつてゐた火が一時燃え上る。それにあたつてゐる中いゝ氣持ちになり、コクリ／＼居睡りを始めとら／＼其處に横になつて眠込んで了ふ。焚き火の火再び細そりバラ／＼と木の葉が散る。小鳥の聲の外には靜寂。孔子眼を覺まし起き上る。三人の弟子の眠つてゐる姿と、自分の上にかげられた子路の上被を見る。その上被を又子路の上にかけてやる。少時物思ひ氣にじつと三人の寢姿を見、それから又薪をとつて火にくべる。火が消えてゐて燃え上らない。それで燧石をとつて音の立たないやうに火を點ずる。しかしその小さな音で顔回は直ぐ眼を覺まし、孔子を見てをき上る。

以下孔子と顔回との對話の間に火は又細々と燃え、落葉と小鳥の囀りとが折々ある。

孔子 おや、起きて了つたか。之は氣の毒な事をしたな。お前には殊に休んで貰ひ度く思つてゐたのに。

顔回 思はずうたゝねを致しました。何とも申し譯がムりません。私共のうち一人は必ず起きてゐて見張りをする筈でありましたのを一番年長の私が齡甲斐もなく眠りこけて、此上ない大任を怠りました腑甲斐なさ、誠に心苦しふ存じます。

孔子 顔回。お前は子路か子貢からかう云はれたのではないのか。「貴方は齡をとつてゐる吾々の先輩だ。私が起きてゐるから貴方は是非一休みしなくてはいけない」と。處がその番人も引き續いた寢不足やら、疲れや、退屈でつい眠む氣を催してつまり三人共一休みする事になつて了つた。まあそんな譯ではなかつたのかな。

顔回 夫子には何事も包み隠す事は叶いません。ほんに被仰る通りでムいます。

孔子 は、何でその要があらう。吾々は既に此上なく忠實な寢ず番をされてゐる身ではないか。吾々を休ませやうとてあの心配性な陳蔡の兵がわざ／＼あのやうに十分な見張りや、御苦勞な警護をしてゐてくれるのに其上なほ吾々が自分の警戒をするのは天下の經濟にも叶はない事だ。今の中に皆たつぶり安眠しておくがいゝ。わしもよく眠つた。王侯の身とても今の吾々のそれ以上に安全ではあるまい。

顔回 只その番をされて居る者がそれ程かけ替へのない貴重な生命でなく、此澆季の世に在つては唯一な、永への後世に於ても最大な光りでなく且つ其番人が盜賊でなかつたら勿論私共も安心して眠る事が出来たでムりませうが。

孔子 だが利の無い事を知つて盜賊になる者はあるまい。わしが千萬の金を持つて

ゐる旅人でもあつたらなるほどわしの命は危なからう。しかし此一文なしの孔丘を殺して見た處で、あの小利に汲々としてゐる彼等の政府が、その禮にどれだけの褒美をくれるものか彼等は知つてゐるのだ。利慾は少くとも互に背き合ふ丈けの正直さを持つてゐるものだ。暴力でわしを亡ぼせると思ふのも馬鹿だが、又金をかけずにわしの首を取れると思ふのも馬鹿だ。尤もあの臆病な政府にはわしを殺す事が利益だと云ふ確信もないらしい。唯わしが嘗てあの國を通つた時、直ぐ一見して國狀が知れたので、立ち寄りもせずさつさと通過して了つた。それを多少遺憾にも思つて――

顔回 それ許りでもムりますまい。彼等は他國の善くなり、榮える事に我慢が出来ないのでムいます。彼等の所望は自國を善き國にする事でもなければ、又強ち孔夫子を亡き者にする事でもムいません。唯、世評の高い孔夫子を見すく他國に取ら

れ、そして他國が榮える事が嫌なので、コソ／＼とその邪魔をする位が望みなのでムいます。

孔子 小人のしさうな事だ。わしが行つたとて其國の武備が嚴になる譯でもなければ、國庫がさう豊かになるわけでもない事は彼等も薄々知つてはゐやうが、とに角わしを人手に渡し度くはないのだな。一個人の力が如何に一國を變化させ、民衆を動かし、天下を搖がす事の出来るものか、又此孔丘にどれだけの力があるものか、彼等が知つてゐやう筈はない。だが何となく彼等も或る不安を感じるのだ。それでわしをこつそり道に遮切つて、事に依つたら此人知れぬ山中に葬らうとでも云ふつもりと見へる。わしを葬るも、葬らぬも天のみの知る事であるのも知らずに。

顔回 實に憐れむべき笑止千萬と申しませうか、片腹痛いと申しませうか。かりに

吾々が一時此山中に葬られたものと致して後に到り、天の葬らざるものを人は葬むる事が出来ず、夫子の御生命が光りの如く幾重もの雲を突き破つて再び此世に輝き出ました時、そして夫子の尊體に加へられた罪が八釜しく天下の口によつて鳴らされます時、其やうな時が假りにあると致しましたら其時は彼らは又驚くべき厚顔さを以て「知らぬ」「知らぬ」と云ひ張るつもりでムリませう。罪は何時の間にか、何處からともなく裏切られるものである事も知らずに。何故と申せば、彼等は最早現にそろ／＼裏切られつゝあるのでムリませう。而も自分等の使つてゐる手足の者によつて。

孔子 手足の者によつてと云ふのは。

顔回 番卒でムいます。少しも怪しむには足りません。何の益にもならぬ、アテも面白味もない此山中の不自由な生活。始めの中は樂なので、喜んでも居りました

らうが、無爲の退屈はやがて樂ではなく、苦になつて參ります。それに食料は一日々々と減じ、それに反して寒さはだん／＼に加はつて參ります。こつそりと屯を抜け出し、賑やかな街の方へと逃げて行く者は昨今少くないやうでムいます。そして一旦ぬけ出た者は再びその故國へ公然と歸るわけにもゆかず、彼方此方と諸方をうろつき歩いては夫子が此山中に御災難に遭つてお居での事をふれちらす事でムいませう。

孔子 しかしその番卒がそのやうにして次第に營を脱け去り、遂には一人も残らなくなつて了ふとしても、それ迄には未だ數日はかゝるだらうな。

顔回 (一寸孔子の顔を見)それはかゝりませう。

孔子 しかし吾々は其數日の絶食には最早堪える事は出来まい。

顔回 ——しかし——

孔子 顔回 お前はその前に吾々の救ひ手が来るだらうと思ふか。

顔回 来るやうな氣は致します。否、必ず來るとも思ひます。併し、あてには致しません。よし救ひ手が來たとしてもその勢は陳蔡の番兵に追ひ拂はれて了はないとも限りません。又たとへ首尾よく彼等陳蔡の勢を打ち拂つて吾々を救ひ出す事が出來ましたとしても、それは狼が去つて代りに虎が來る事に過ぎないかも知れません。

孔子 顔回。それでもお前等は本當に悔む事はないか。わしはお前を信じてはゐるが、あの若い子路や子貢はわしを怨み、天を怨むまいか。

顔回 (一寸悲しい思ひあり氣に孔子を見る) 今更の其お訊ねは御尤もとは存じます。夫子のお眼に私共が未だく信仰の充分な者と映り得ない事は致し方ありません。しかし少くとも私共は何が恥であり、何が名譽であるかを眞に知つては居るので

ムいます。勿論目のあたりに成功を見、眞理と正義との捷利の確證を見るよろこびに比すれば、道の爲め、此世の爲めに飽迄節を持って餓死する誇り、討死する名譽は淋しいものには相違ムりますまい。其時には晴やかな胸にも切ない悲愴を湛えながら私共は眼をつぶらねばなりません。又民衆の餘りの盲目さと、破廉恥とに一時は腹も立て、絶望的になり、世と人とを怨む事も致しませう。併しく、最初から豫定の中にありました事を諦めました處でそれで私共は天を怨みは致しますまい。あの愛すべき若者達の美しい寢顔をお眺めやり下さい。丁度サソリがその毒を吐ききれずに苦しむ様に、彼等はある若い全身に煮え沸つてゐる獻身の熱情を持って餘して苦しむで居るのでムります。人を脅かす死と云ふ黒雲などは彼等の焔のやうな赤い心の上に一點の影をも止める事は出來ません。如何なる勇士と雖も彼等のやうに欣々として道の爲めに火の中に飛び込みは致しますま

い。世にも逢ひ難き恵みに依りまして、彼等は固く信じて居ります。眞理の無窮なる如く、夫子の不滅なる事を。人間は聖人をも餓死させ、或は自分が何をしてゐるかも知らずに尊い父親の首を刎ねる事さへするもので△います。が、それにも拘はず彼等の内の何處かに潜む良心は又その自から埋めた者を墓場から蘇らせ、永久に生かしめるので△います。

孔子 うむ。

顔回 而して、選ばれたる者の仕事は人間をあてにする事ではなく、却つて彼等をあてに出来る様なものになす事、又眞に頼りにすべきものを彼等に知らしめる事で△います。頼るべからざるものゝ如何に頼るべからざるものであるかを知るに従つて、眞に頼るべきものに頼る事の如何に心強く、安樂であるかを不肖乍ら私共は感じて居ります。永劫なる無窮の流れのうちに沈んでは浮び上り、絶えむとして

又つゞき、徐ろにうねりうねつて生き流れ行くさゝやかにしてしかも鞏固なる人間の正義、正義の神祕、神祕の大生命を私共は夫子の逢ひ難き御導きにより信じる事が出来ました。もし私共にしてその大生命と共にあるならば、何で私共をして永への世に生かしめ、最後の捷利を必ず獲しむる者を私共は怨む事が出来ませう！

孔子 顔回。流石はお前の言葉だ。お前の云ふ事は一々本當だ。それを聞いてわたしはすつかり安心し、満足した。今迄とてもさうではあつたが、猶ほ更に意を強ふする事が出来た。お前のやうな者をわしの弟子と呼べるのはわしの名譽だ。わしの幸福だ。今のお前の言葉に對してわたしは篤く禮を云ひ度い。

顔回 (恐懼して) その勿體ないお言葉では餘りに恐れ入つて羞しさに堪えません。

私の申した言葉は凡て淺く、歪にした夫子自らのお言葉に過ぎないので△います。孔子 同じ事をわしは又わしの先聖に對して感じてゐるのだ。だが、獻身を急いで

はならない。美しいと云ふ事よりはもつと貴とい事がある。天命には従順でなければならぬ。しかし運命をそれと間違へてはならない。わしは伯夷のやうに自ら求めて死なうとはしない。わしは義人では満足の出來ない者だ。義人には自殺が出来るが仁者には出来ない。聖人に於ては猶更だ。わしは今より十年前かの桓魋が大樹の下にわしを殺さうとした時にも既に用意は出来てゐた。だが不思議な天運によつて此六十三歳迄生き存らへて來たわしには幾多の義務が未だ課され残つてゐる。今わしが死んだのでは民衆は餘りに據り處が無さ過ぎる。わしの使命は重大である。顔回。お前もさうは思はないか。

顔回 (面を伏せ涙ぐむ) 誰か眼ある者でさう思はない者がムりませう。夫子がお隠れになられて誰がその代りに世を照らして呉れませう。

孔子 民衆は馬鹿だ。餘りに無知だ。だが可哀相だ。彼等が無知であり、邪まであ

る事を知れば知る程わしには不思議に彼等を見捨てる事が忍びなくなる。そしてわしの運命と天職の深き事を感じないわけにゆかない。さうだ。今の世にわしが起たないで誰がわしの代りを勤めてくれやう。わしは此身を捧げてひたすら天命の前に従順である事を希ふ者ではあるが、苟も天命がそれを拒まない限り、わしは飽く迄もわしの行く手を遮切る運命を拂ひのけて、わしの餘生を此世に獻げきる事を強く強ゐられるのだ。そして、わしの氣持ちでは運命も亦それをわしに許して、わしを此の圍みから救ひ出してくれるだらうと云ふ氣がするのだ。いや、必ず救ひ出すだらう。

顔回 いかにも夫子は屹度その救ひ手と呼ばずしてお呼び寄せになる事は確かと思はれます。しかし既に中國のありとあらゆる諸國をかゝる屢々の九死一生の御難儀と裏切られたる失望のうちに御遊歴なし盡されたる今、何處からその救ひ手が

参るでムりませう。

孔子 宋から来る。さもなくば衛から来る。此鎮重な態度を取つて最後に残つた二國にはわしは未だ多少の望みを屬し度く思ふ。わしは虚禮偽善の國には實に屢々裏切られたが、しかし亂れてゐても正直な國民には未だ聊かの未練を持たないわけに行かない。わしの豫定だと救ひ手はその何れかゝら、しかも明日のうちに來るらしく思へる。

顔回 (少し驚く) 今明日のうちに。

孔子 さうだ。心くとも宋の政府は最早わしが此處に圍まれてゐる事を知つたにちがひない。彼等は間もなく大軍を率ひて此山に來り、難なく陳蔡の兵を討ち拂ひ吾々をとに角救ひ出してくれるだらう。

顔回 さうなるのが當然ではムりますが、夫子が左様お感じになるのならばいよいよ

よ必ずそのやうになるでムりませう。——いや、人には負け惜しみと聞こえるかも知れませんが、實際の處、私共には何となく此山もなつかしく感じられて参りました。思ひがけない人手によつて行手を塞がれましたお蔭で、私共は久しぶりに自然の愛に親しむ事が出来ました。人間の邪惡に心が暗くされた時は自然の懷に歸るに限ります。それ程人の心を慰め、元氣を恢復させてくれるものはムりません。意地悪い子に泣かれた子がその母に頭をで撫られながらさとされて、再び憎みと、怨みとを忘れた明るい氣持ちになり、又のこゝ外へ出て行く氣になるのと同様でムいます。あの小鳥の聲、枯葉のそよぎ、穏やかな落葉、梢の間に見へる青空、凡ては慈愛と善良に充ちて居ります。丁度病中に美しい夢を見るやうな氣が致します。

孔子 おゝ。夢と云へばわしは今うたゝねのうち久しぶりに周公に遭つた。何と



云ふ不思議な夢を見た事だらう。わしは彼と話しながら歩いてゐる。宋へ行かうと思つてゐるのだ。何でもそれは恐ろしく明るい、廣く、遠く、眞直な、しかし淋しい道であつた。だがいくら行つても、道は宋へは出ない。はてどうした事かと思つて周公に訊いて見ると、其筈だ。此道は宋に行く道ではなく魯に歸る道である、と云ふのだ。そして彼は頭をこめてわしの手にかかを握らせたかと思ふと、丁寧に一揖して去つて了つた。何かと思つて見ると彼のわしに呉れたものは墨であつた。變な事をするものと思ひ乍らわしは又道を變へて歩きだした。今度は衛に行かうと思つて。處がわしは又道で伯夷と叔齊に出遭つた。わしは喜んで彼等と話しをし乍ら長い事歩いた。だが、不思議な事にはわしは又道にはぐれて了つた。どうしてわし達は衛に出ないのだらうとわしが訊ねると。其筈だ。此道は魯に歸る道である、と彼等は又云ふではないか。そして或る處迄來た時に彼

等はわしの前に跪き、一本づゝ筆をわしに呉れて何か祝福するやうな眞似をし、そして去らうとした。どう云ふ意味かと思つてわしは彼等の名を呼んだ。そして眼を覺ました。

顔回 墨と、筆。——不測なお夢でムりますな。どうやら意味の深い暗示のやうにも思はれます。

孔子 はゝ。わしも少し驚愕して、こんな分らぬ夢を見たのかも知れない。體が昔程強健ではなくなつたので、何處かに弱い心が生じ、それがわしの敬愛する人々の姿で却つて逆にわしに注意を與へてくれたのかも知れない。

沈黙。焚き火の火再び消え、落葉切りに落ちる。急に、けたまほしい関の聲につゞいて鳥の羽音がする、子路と子貢眼を覺ます。

孔子 何事だらう。

顔回 (起ち上る) 夫子の御豫言が早くも中つたらしふみます。救ひ手が参つたのではありますまいか。

子路 (飛び起きる) 何、救ひ手が来たのですつて？

子貢 (同) いや、来たのですか。

顔回 まあ、慌てなされるな。味方か敵かまだ分りはしない。敵が来たつもりで用意でもなさるがよい。

子路 用意をするにも用意の仕様はありませんよ。着のみ着の儘の他には杖一本無いのですからね。

子貢 何だ、見張り番、君も眠つて了つたのだな。

子路 眼丈け一寸休ませたのさ。耳は此通り鳥の羽音も聞きもらさない。さあ敵でも、味方でもござんなれだ。

孔子 急に気が強くなつたな。は、騒ぐほどの大事ぢやない。それより自分の心掛けでも大事にして居るがよい。

再び関の聲。それから引き続き物騒がしき人の聲、段々近くなり、「此處だく」なぞと云ふ聲聞こえ、やがて宋國の攝政陽策沈、その部下を引きつれ登場。

部下の一人 孔夫子のお居での場所はこちらでムりませうな。

子貢 いかにも左様でムる。

攝政陽策沈 (孔子の前に進み出で、丁重なお辭儀をする。) 私は宋國の攝政陽策沈と申す者であります。久しく御尊名を欣慕して居りました。先づ々々御尊體の恙なき事を知つて喜び此上なき事を御認め下さい。又遅れ乍ら吾等遠來の甲斐あつて、かの破廉恥なる蠻賊共を首尾よく蕩掃致し、御尊體を始め御隨從の方々をめでたくお危難より御救ひ申す事が出来ました吾等の無上の喜びと、名譽とを御認め下さり。

度う存じます。

孔子 御志と、御苦勞に對して深く感謝します。——吾々の此處での災難を何時御承知になりました。

攝政 (二寸まごつく) 先日——いや、昨日の夕刻の事でういました。町の者が見知らぬ浮浪人から聞き、役人が町の者にその事を告げられ、役人は更にその事を上官に傳へ、それから上官がその浮浪人を捕へさせて審問に附し、彼が陳蔡の番卒であつた事と、孔夫子の御災難に關する一部仔什を告白するに及びまして、その事を私に告げ、かくて始めて國內を擧げての騒ぎとなり、漸く御救助の軍を整へる運びに到りました。然し出来る丈け急ぎはしましたが何分にも種々の準備に手間取り、且つ朝議が一決致した時は既に夜半でありました爲め、止むなく今朝迄出發を延引しなければなりませんでした。それに御承知の通り道程は中々に遠く、且

つ嶮岨でありますので、特別な強行軍を以てしても半日以上はどつしてもかゝります。それ以上の急ぎ方を兵士に強ゐる時には肝腎な戦に役に立たなくなります。斯様なわけで、心ならずも漸く只今に到つて目的を果す事が出来ましたやうな次第、遅參の儀はよろしく御諒察を願ひます。

子路 (旁白) ふむ。功名を鼻にかけていやに頭を下げるわ。安心して飴を食はせて恩を被せて、さて其先きで何をたくらむでゐるんだ。

孔子 わし達は幸運を喜んでゐるのです。そんな事は素よりお氣にかけられるには及びません。して貴方は吾々を迎えに来て下されたのですか。それとも只吾々の難儀を救助しに来て下されたのですか。

攝政 は、。そのお訊ねには恐縮します。餘りに明白な事と存じましたので却つて申し落して了つたのです。孔夫子の御難儀をお救ひする事は天下の義務——と

申すよりはむしろ雪辱であります。吾々は此當然な雪辱の任に自ら進んで當つた事を以て少しも誇りとは感じません。併しながら天下の諸國が皆その不正と、偏狭なる國家的利己心と、臆病と、暗愚との爲めに心から夫子を迎え、その御教を容る事が出来なかつた時、禮儀と、誠意とをもちまして夫子を歓迎し、その仁義禮智の教へを國法と奉ずる國がありましたなら、その國はよし小國であらうとも萬國に誇るに足ると信じます。私は國民の熱心を代表致し、特に攝政の身を以て遙々此山中迄御救助旁々御出迎えに罷り出た次第で。——

孔子・王はお幾つですな。

攝政 本年十七歳、いや、十五歳になられます。聰明で、眞卒な御資質をもつてお居でになります。何分に未だ若年だあらせられるので、先王の遺言に従ひ、彼が二十歳になる迄は不肖乍ら私が後見を致し、且つ攝政の大役を務める事になつ

て居ります。實は夫子をお迎え容れ致し度いと云ふ宿望を早くより抱きながらそれを實現するに當り、他國より多少の遅れを取りましたのも左様な事情からで、——と申すのは、自分自ら君主であるのとは違ひ、攝政の身にとりましては何事を爲すにも兎角躊躇や、面倒が付き纏ふもので、いかに善き事であらうともそれが英斷を要するやうな事であればある程煩瑣なる手續きを経てかゝらねばなりません。さもない時には直ぐ專制と云ふ國民の誤解を招きます。さなきだに周圍の嫉妬、猜疑、卑屈なる野心は兎角私なき治者の晴天白日の心の上にさへ僻眼を向け、何かと難癖をつけ度がるもので、まるで人間と云ふものは他人の潔白を好み得ないものゝやうであります。あに圖らん、一人の意志よりは萬人の意志を尊びたとへいかなる暴君が出やうとも專制を働く餘地が無いやうにとて、夫子に律法を造つて頂くやう望んでおりますのはかく申す私でありますのに。——

孔子 では内亂でも起りかけてゐるのですかな。貴方に對して謀叛が企てられてゐるのですかな。

攝政 かやうな事が起り兼ねないとは始めから豫期してゐた事ではありませんが。いやはや、民衆の頼りない事にも呆れるの外はありません。忘恩と云はうかかまら盲目と云はうか。一寸した佞人の甘言にまんまとのせられて、昨日は私を救ひ主のやうに呼んでおき乍ら、今日ではもう國賊——王位の篡奪者と迄云つてゐる位なのですから。

孔子 貴方はそれでわしを味方にしやうと云ふお積りで來られたのかな。

攝政 その代り私は先生を御危難からお助けしました。——如何なものでせう。  
子貢 (旁白) 凡ての巧言令色の腹はこれだ。

孔子 善い處に氣がつかれた。事情によつてはお力にならないとは云ひません。

攝政 しかし狡猾にも裏切り者は幼少なる王をまるめ込んで、自分達の頭に祭り上げたのです。従つて單に名義上から云へば、彼等に抗する事はとりも直さず、君に對する不忠となるわけであります。

孔子 なるほど。

攝政 それで實は私は忠と云ふ事を重んぜられる先生に先づその御解決を仰ぎ度く思ふのです。私は不幸にして止むを得ず王には叛くやうにならうとも、國には飽く迄も忠義であるつもりです。國民には何處迄も叛かないつもりです。其私の眞心は此處に据へ居る私の部下にお訊ねになつても分りますが、實に王こそお氣の毒の到りです。巧言令色な奸臣共に體よく奉られて、そのいゝ餌食になつた擧げ句はどんな目に遭はれるかは火を見るより明かなのですから。

孔子 貴方が内に顧みて疚しい處なく、不忠な處がないならば何處迄も貴方の信ず

る道をお進みなさるがよい。内に願みて疚しい處なく、不忠な處がないのは忠の本だ。其人は少くとも己れの忠に頼つて、何も怖れ、悔む處はない筈だ。己れに忠ならば偽りを怖れず、人に忠なれば人を怖れず、君に忠ならば君を怖れず、民に忠ならば民を怖れず、體に忠ならば病を怖れず、天に忠ならば天を怖れない。凡ての災厄は必ず何かの不忠から生ずるのだ。貴方が貴方にとつて最高の忠と思へる忠に凡てを捧げて従つて居られるならば其他の事は貴方の關はり知る處ではない。

**攝政** 左様。關はり知る處ではありませんが併し、いかに忠を以てしても一向にそれが通せぬ許りか、却つて不忠を以て報ひられるものをどうしませう。此方が忠であればある程、それを不忠にして了ふ者をどうしませう。現代の人心の淺ましさ、浮薄な我利々々主義、忠など云ふことは全くの死んだ言葉で、實に藥にし

度くもないのですから。

**孔子** だがわしの忠は既に世に克つたのだ。わしの云ふ事をお聴きなさい。人間が忠なしに生きて行けない事は生物が日光なしに生きて行けないのと同じだ。丁度水に潜つた者が息をしに浮び出ると同じく、人間はその不忠に永く堪え得る者ではない。人々は識らずくの中にも忠の此世にある事を信じ、それを探し求め又それに依つて生きてゐるのだ。だが斯くして其人が如何なる忠に出遭ふか、又それに出遭ふか、否かは一にその人自らの忠の性質に依るのです。恩を知り、恩に報ゆるは、恩を知らず、恩を忘れるより優つてゐる。しかし自ら進んで忠なる事は報恩と云ふ事よりは更に優つてゐる。だが單に忠なるのみならず、最も善く天命に叶ふ大なる忠を選んで之に従ふ者はそれよりも猶ほ優つて居り、更に進んでそれに従ふ事を樂しむ者は最上である。かゝる人を天も人も亡ぼす事は出来な

い。彼は亂の中に在つても治の中に在り、人の愛を報ひられなくとも天の報ひを  
樂しむ事が出来るのだ。

攝政 被仰る通りです。が、しかし夫子は祖國を捨て、お去りになつたではありませんか。

孔子 さうだ。それがわしの使命であつたからだ。今時の亂世に於て一國に忠なる  
事は他國に不忠なる事を意味する。わしが自分の愛する故郷である魯を去つて、  
他國に道を説き、治を擧げ、その國を榮えさす事はやがて魯にそむき、抗する事と  
同様にも見える。だが貴方が忠なるが爲めに宋國に忠なると等しく、わしは忠な  
るが爲めにはたとへ魯に叛いても諸國に周遊しなければならなかつた。誰か自分  
の兄弟の家を訪ねるのに憚る者があらう。一の病家から他の病家へ行くのに何で  
不義を感じる醫者があらう。天下の到る處皆祖國であるのに何で一國を去る事が

不忠となるであらう。天命の爲めに凡てを擲つて、死に打ち克つてゐる者に何で  
人間を怖れるいはれがあらう。そして魯も亦わしのその事を知つてゐるから、わ  
しが他國の爲めに如何に忠實に盡さうとて、今ではわしを謀叛人だとか、賣國奴  
だとか思ふ者はない。わしはかう云ふ特別な人間だと思つてゐる。そしてわしが  
久しぶりに國に歸れば彼等はわしを殺さずに、無事に暮らさせて呉れるだらうと  
わしは考えてゐる。わしは自由だ、わしは幸福だ、わしの大手を振つて行けない  
處は天下の何處にもない。たまに餘計な心配をする者があつて私を道に遮ぎつて  
も、暫くかうして休息して待つて居れば貴方のやうな見知らぬ友がやつて來て、  
又その道をあけて呉れるのだ。武王が武を以て天下を征服したやうに、わしの忠  
は天下を征服したのだ。わしは只天命に従ひ、禮に従ふ。それがわしの忠だ。  
攝政 皆の者。國民一同にお言葉を聽かせてやり度くてなりません。私が覺束ない

受け賣りを致したのでは效き目はありますまいが、夫子のお顔を仰ぎながら、夫子のお口から出る潑刺たるお言葉に接すれば如何な腹の黒い奸物とても多少心にこたへない事はありますまい。大なる光りに眼のあたりふれれば如何な人を化かす事の上手な者と雖も、我身のきたなさをいくらも見ない譯には行きません。かう云ふ人間も世の中にはあると云ふ事を彼等に見せしめて、少しは恥を知らしてやり度いものです。——お入でを願へるでせうか。

孔子 喜んで。併し迷信を以てわしを迎えてはいけません。わしの説く忠は禮の爲めの平和な忠であつて、一方に忠なるが爲めに他方に不和を醸し、敵を作るの忠ではないけれども、わしが只和解と平和を齎らす者と思つてもならない。わしは何處迄も禮に従ふ者と、誠なる者の味方だ。誠にあらずんばわしを味方となす事は出来ない。己に克つて禮に従ふ者の上のみわしは平和を齎らすのだ。己れの

利益よりも平和を愛し、平和よりも禮を愛する者の上のみわしは力を與へるのだ。

攝政、沈黙す。此時何處ともなく角笛の音が聞こえる。再び鳥の羽音。それから攝政の臺詞の中に馬蹄の音がだん／＼近く／＼こえて来る。

攝政 (不安な顔つき) おや、思はず喜びの爲めにお話に打ち込んでゐる中に何か邪魔物が来た様子です。(耳を傾ける) 事によると悪者達からの追手が来たのかも知れません。馬鹿者共が、又何か私の讒言でもして、夫子から私を引き裂かうともたくらむだものかも知れません。ふむ。何でも自分に化かせない者はないと思つてゐる狐共、一つ夫子を化かして見るがよい。おや！ これは何だ。

衛の國の公妃、鶯南子、美々しき狩獵の服裝にて左手に鞭を持ち、弓矢を從者に持たせ、大臣陳文子及びいろ／＼の武器を持つ其他の從者を從へて登場。



妃 (立ちたる儘傲然と一同を見廻はす。二三歩前に進み、孔子をじつと見る。) 孔夫子と被仰るのは貴方?

一座の者互に顔を合せす。

孔子 さうだ。わしは孔丘だ。

妃 矢つ張り妾の思つた通りだつたわ。そして矢つ張り妾の想像してゐた通りの御容子をしてゐらつしやるわ。何から何まで。きつとかう云ふ方にちがひないとかねて思つてゐました。あゝ本當に嬉しいこと。妾の心の眼は間違つてはゐませんでした。貴方こそ本當に麒麟ですわ。妾には貴方のお説教を伺はずとも、貴方を一見した丈で其事がはつきり分ります。貴方こそ、待ち望まれてゐた方。現はれる事を強ゐられてゐた方。使はされた方。讚美されるべき方。祝福された方。夫のいとし子。妾は満腔のよろこびをさゝげて貴方の前に跪きますわ。(半分跪く)

孔子 お起ちなされ。貴女はどなただ。

妃 (起つ) あゝ妾、自分の名を名乗つた事がないので、それを云ふのを忘れてゐました。妾は衛國の公妃、南子です。

大臣 私は宰相陳文子と申します。

攝政 (表情あり) 南子。おゝ貴方があのお妃ですか。評判の。

妃 貴方は誰。

攝政 (少しまごつく) 私は——私は、宋國の攝政陽笨沈やばんちんと申す者です。初めてお目にかゝります。宜しくお見知りおき下さい。

妃 あゝ、貴方があの評判な陽笨沈さん。あの叛逆人の——

攝政 (慌てゝ) 何叛逆人ですと? (努めて冷靜に) はつは。それや偽が本當と云ふ事になれや本當は偽になるわけです。尤もどうせ一人の具眼者が現はれれば眞偽の

別は立ち處に判然とするのですからそんな有り來りな誤解をうけたつて私は平氣は平氣ですがね——。

妃 本當にね。

大臣 (そつと公妃にさゝやく) お妃。藪蛇をやつてはいけませんぞ。

妃 (無頓着に攝政に向ひ)そして貴方は孔夫子をお迎えに入らしつたの？

攝政 孔夫子の御危難をお救ひに參つたのです。兎角眞理の世にはびこる事を喜ばない小人共がこつそり夫子を此山中に幽閉して御難儀に遭はせて居るとの由を聞いたものですから驚いて飛んで來たのでした。然し、まあ幸に夫子の御身にさしたるおさはりの無いうちに首尾よくお救ひする事が出來たと云ふ事はお妃方にも喜んで頂き度いものと思ふのであります。

妃 (一寸いやな顔をする。) 本當にお手柄でした事ね。御名譽は永く貴方の黒いお名

の上に残る事でせう。そして貴方はそのお手柄の報酬として、夫子を迎えて、貴方のお國の騒動を鎮めやうと云ふおつもりで？

攝政 いや／＼そんな事は——そんな事は、私の念頭にはなかつたのです。私は只

子路 失禮ですが、貴方は先刻、直ぐ「その代りに——」と被仰つたではありませんか。

攝政 左様。それは勿論、さう云ふ事になればそれに超した幸せはありませんからな。しかしそれは要するに第二の事、僥倖に過ぎないのです。

妃 そして首尾よくお約束をなすつたの？

攝政 (孔子の方を一寸見て) まあ、私の忠誠は漸く偉大なる具眼者に認められる正しい運命に遭遇したと云ふわけです。

妃 (大臣に向ひ) それ御覽な。お前さんがぐずぐずしてゐたものだから折角麒麟をつかまへに来て人に先を越されて了つたぢやないの。

大臣 (妃に鋭くさまくやく) お妃! 私に「お前さん」なんて、そんな言葉づかひをしちや駄目です。「お前」と被仰い。「お前」と。

妃 (大臣を睨む) 妾の腰掛けをお出し。(大臣、床几を差し出す。妃それに腰をかけ、孔子達に向ひ) 貴方々はそれではさぞおひもじかつた事でせうね。一體幾日こんな處にとじこめられて居らしたの?

子貢 七日七晩。

妃 まあ。七日七晩の間全で斷食しておゐでなすつたの?

孔子 一度飯を食べました。

妃 如何してお米を持つてゐらつしやいましたの?

孔子 番卒から賣つて貰つたのです。

妃 (大袈裟に驚いた風で) まあ、賂まいたいをなさいましたの? 番卒から。

孔子 見やうによつてはさうも云へる。

妃 流石の聖人も食の前にはさう清廉ではゐらつしやれないものですわね。

孔子 わしが賂をしたとて何をさう騒ぐのだ。清い水は潔白であらうとする事を知らない。わしにもつと持ち金があつたらわしはそれを彼等に賂して此處を抜け出たであらう。俗人は金の爲めに心を賣り、又心を賣らせる。それが賂だ。わしは金の爲めに心を賣りはしない、人間を賣りはしない。却つて金を賣つて彼等の善行を買つてやつたのだ。現代ではいろ／＼の事が位置を顛倒してゐるので人は兎角分りきつた事を間違へる。わしとわしの弟子達との生命をそれで救ふ事を得させれば金としては手柄過ぎるのだ。孔子は人命の爲めに金を賂したと貴方方は皆

に云ひふらすがいゝ。人間の爲めに従順につかはれて居さへすれば金は重寶なものなのだ。別に賤しむに當らない。

妃 あんまり重寶過ぎるので貴いものになり過ぎたのですわね。

孔子 人々は眞に貴いものを知らないのだ。眞に貴いものゝ有り難さを知らないのだ。だから貴くないものを貴び過ぎ、有り難がるのだ。今の世で人は暴君や富者を責める事は出来ない。彼等に勢力を有らしめるのは人々があつたやうな權勢や金錢を何よりも貴んでゐるからの事だ。多數の貴ぶものが勢力を得るのは當然だ。多數の賤しむものを獨りで貪る強慾者はない。彼等は利に脆い如く又名譽の前に弱いのだ。眞に貴いものを知らざる彼等は又眞の名譽と不名譽とを知らない。凡ての災厄が此無知から生じる。わしは此無知を救はんが爲に人々に學を奨め、以て其知識によつて彼等に物の評價を正しくなす事を得さしめる。物の評價が正し

く出来るやうになるに従つて、人々は物の價値の順序を知り、自づと守るべき物を守り捨つべき物を捨て、不幸を感じない。且つ又自分の名譽にも幸福にもならないものを奪ひ合つて徒らに人を苦しめ、人を嫉むやうな事はなくなる。かくてあらゆる物は皆正當の地位に公平に配列せられて、禍を生むやうな事はなくなるのだ。

妃 けれども、人民をそんな風に教育して行くとすると、世の中が本當に公平になる前に随分面白からぬ時代がありはしないでせうか。正しい理解が来る前には長い誤解があります。不正な時代が悪いのは云ふ迄ありませんが、又生嚼りの思い上つた、虚偽な時勢と云ふものも随分片腹痛いものです。頭よりは心を尊び度いものです。頭許りで道徳的になつた心算であるよりも、そんな理屈は知らないでも心が質朴である方がどんなに美しい事でせう。どうせ人間は自慢し度くて堪

らない動物です。一人の賢人が現はれ、ばきつとそれにかぶれた百萬の法螺吐きや、偽善者が現はれます。なるほど、貴方のお力で人民はえらくもなり、貴いものも知るでせう。が、其實本當の禮からは遠ざかるのです。自然の美しい人情や、謙遜からは遠ざかるのです。人を輕蔑する事丈けは達者になつても、上を敬ひ、主に忠順であると云ふ民の美德からは遠ざかるのです。妾は世の中が正しくなる事は心から望みますが、人民が此上増長した、無禮な、鼻持ちのならない時代を見度くはありません。

孔子 偽善を憎むものが二つある。それは眞なる善と、惡とだ。偽善を憎むもの必ずしも善人ではない。惡人も亦之を憎む。さかしき偽善者は偽善を賣めて善を愛する事を装ふ。だが、たとへ萬億の偽善者は現はれやうとも善は説かれねばならぬ。先王の道、正しき傳統は傳へられねばならぬ。偽りに克つものは眞の他になく、偽

善に克つものは眞の善のほかにならぬ。(弟子達に向ひ)お前等も聞いておけ。眞に善を知つて行ふものは結果を憂ふるものではない。それは最後のものだからである。それを信じて傳ふるものは幸だ。

妃 ほんに貴い御使命ですわね。幸福なお方。處が悲しい事には貴方が遣はされて入らしつた處は貴方の命令者が想像なすつたよりも尙ほもつと亂れてゐたのでお氣の毒にも貴方のお言葉に従ふ國は何處にもありませんでしたのね。

孔子 さうだ。わしの聲に答へた國は何處にもなかつた。わしの叩く戸をあけた家は何處にもなかつた。だがわしの聲は消えなかつた。或る者は聞かず、或る者は耳を塞いだが、わしの聲はあらゆる家の隅々迄も響いたのだ。見よ、わしには既に三千の弟子がゐる。味方がゐる。此三千のつはものは三千萬の軍よりも強い。わしのしたゝらす一滴は百萬の毒液を呼ぶとも、その一滴は百萬の毒液の百萬倍

よりもなほ強いのだ。

攝政 しかし夫子のお聲に答へる者は何處にもなかつたわけではありません。此處に一人居ります。

妃 おや、貴方は未だ夫子を引き入れるおつもりなの。此世で一番貴方の味方になりにくい方を味方にするおつもりなの。

攝政 それなら誰が私の味方になつてくれるのです。

妃 妾がなつて上げますわ。それが貴方のやうな賣國奴には一番相應はしい味方ですわ。

攝政 何で私が賣國奴です。

妃 では貴方は屹度御自分の國をお賣りにならないとお誓ひになる事が出来て？

攝政 誓ひますとも。國の爲め、民の爲めには君に叛くと云ふ自分の汚名をさへ被

て省みない私です。

妃 しかしそれでも未だ凡てを擲げうつた事にはなりませんよ。

攝政 何だか貴女の被仰る事は私にはよく分りません。しかし貴女が私の味方になつて下さる事が出来ると云ふのはどう云ふ譯です。

妃 貴方と妾とが心一つにして力を合はせれば二つの國を合併させる事も出来るぢやありませんか。國と國との合意の合併が出来れば侵略した合併よりもどんなに文明的で有益な事か分りません。さうすれば他國の暴力に對してだつてひどい災害をうける事は免れます。それに貴方の國の國民と妾の國民とは氣質も似通つてゐますからね。

攝政 なる程、それも大きにさうですが――

大臣 お妃。貴方は此處で輕々しくそんな口契約をなさるおつもりですか。飛んで

もない盜賊を呼び込んで後で何が無くなつた、かにを取られたと騒いだつて取り返へしはつきませんぞ。

妃 自分が盜賊だもんで。

大臣 何ですつて？　へん。これだから位置の高い者には虚禮やおべつかが必要になるのだ。正直に國の爲めを思つてうっかり何かに反對すれば直ぐ途徹もない猜疑がかかるのですからな。

攝政 まつたくです。まつたくです。

妃 お、貴方は誤解されて居らつしやるのですね。お氣の毒な。自分は誤解されてゐる、誤解されてゐる、と云ふのを唯一の楯にして其陰げで悪事を働く者もありますが「正義たる事は誤解される事」と云ふ諺もありますからね。

攝政 其通り。其通り。尤も只誤解されてゐる許りでもないのです。實は誤解して

ゐなくとも、誤解してゐるのと同じ事にしてさふのです。それは感情の問題で、理解の問題ぢやないのですから。

妃 しかしそれが矢張り誤解ですわ。お氣の毒ですわね。妾の國にでも居らつしやれば眞價にはちやんとそれ相應な地位と幸せを與へて上げる事が出来るのに。

大臣 お妃。お妃。口を迂らしちやいけませんよ！

攝政 お妃。貴女様は本當にお眼の高い方です。貴女様のやうな君主を戴いてゐる國民は幸です。

妃 (だん／＼誘惑的に) いえ、妾は君主ではありませんの。君主は妾の夫の靈王です。しかし王は永い御病氣で二十年もすつとお床に就きつきりでゐらつしやるので、實際の國政を司つてゐる者は妾なのです。

攝政 え、王は御病氣で、……？　そして今でもすつとお床に就いてゐらつしや

るのですか。

妃 (淋しさうに益々勝惑的に) ええ。今では南の方の氣候のいゝ離宮にすつとお移してあるんですの。妾は、いくら國をよく治めて行き度いと思つても矢つ張り女一人の腕ではね。

攝政 あゝ、それは何ともお氣の毒な。――

妃 貴方が誠實な立派な方と云ふ事は眞理が證明してゐますわ。だつて此不正に與みする筈のない孔夫子が貴方を信用なすつて、貴方に力を添へるお約束をなすつたと云ふぢやありませんか。こんな確かな證明が何處にあるでせう。おゝ貴方のやうな立派な大臣がゐてくれたら……

攝政 (陶然として我を忘れ) おゝ、貴女様のやうな皇后に仕へてゐられたら……  
妃 妾のやうな皇后に仕へてゐられたらどうだと云ふの? 陽笨沈さん。

攝政 (思はず身を乗りだして) おゝ、もしもさうだつたら私は、私は、私は、……身命を擲うつても。

大臣 チョツ! 何たる事だ! 言葉づかひ迄そつくり變つて了ひやがつた。

妃 でもそれはお互に出来ない夢ですわね。お國が違ふのだから。

攝政 ど、どうして出来ないのです。國を合併すると被仰つたではありませんか。

妃 (笑つて) あんな事冗談よ。どうしてそんな事が出来るでせう。妾の方で出来たつて今の境遇にある貴方のお力で。さうでしよ? 陽笨沈さん。

攝政 國として出来なくとも私一人でやれない事はありません。何をお笑ひになるのです。どうしてそれがいけないのです。「國道有るに富貴ならざるは恥なり。國道無きに富貴なるは恥なり」とは此處にお居での孔夫子も云はれたお言葉です。昔から無道の國を逃れて有道の國に赴き、その志を全ふした志士仁人はいくらも



例のあることです。第一此孔夫子を御覽なさい。道に忠なるが爲めに、祖國に對する小さい忠を捨て、他國を周遊しておゐでになるではありませんか。

子路 (憤慨して旁白) 馬鹿! 道が違ふわ。

妃 (溜息を吐く) あゝ、誰か妾のわきにゐて、妾をたすけて力になつて呉れる善い人間がゐてくれたら。妾は本當にさう云ふ頼もしい家來がほしいのです。

大臣 私、私が、ゐるではありませんか。

妃 えゝ、政治の「せ」の字も構はないで、夜晝妾の後をつけて廻るより能のない裏切り者がね。

大臣 そして貴女は私の代りに此色魔を不貞な寢所へ引つ張り込まうと云ふのですか! あゝ、畜生! かうなつてはもう破れかぶれだ。何もかもぶちあけて了へ! おい、攝政。好色狐。まんまと俺達の蹄係にかゝつて脆くも賣國奴になりおつた

な。

攝政 何、蹄係だと? ヘン、君は自分が蹄係にかゝつたもんで苦しまぎれにそんな出鱈目を云つて、人をおどかすつもりだな。君こそお拂ひ箱の泥坊狐だ。

大臣 ふむ。顔色が變つたな。不安の餘りにそんな事を云つて、此方を化かさうとしたつて此方は一枚上手の古狐だ。口惜しけれや此お妃に訊いて見るがいゝ。化かされたのは君か、僕か、と。

攝政 (立ち上る。) お妃 お妃 お妃! 一體どうだと云ふんです。あゝ、私は貴方様の前にかうして……(と妃の前に跪く)

大臣 (刀を抜く) さあ、お妃。何とか被仰い。一か八か。俺は此劍で……

妃 (鞭で大臣を一寸打つ) 大臣。陳文子、妾の前です。孔夫子の前です。そんなものを引つ込めてお了ひなさい! (興奮して笑ふ) あゝ、面白い。妾は之で氣がすんだ。

攝政 (頓へながら) 何ですと。お妃! あゝ俺は夢にうなされてゐるのか。それとも死ぬるのか。

妃 (冷やかに) 陳文子。妾の可愛い忠臣。心配させて御免なさい。お前さんが苦しまぎれに眼をつぶつて放つた矢は運よく中つてゐたんです。妾は一寸孔夫子に芝居を見せて上げたのよ。聖人が仁けの餘りに買ひ被る人間と云ふものゝ本性はどんなものかと云ふ事をね。

攝政 (絶望的に冠り物をたゞきつける) 畜生。あゝ、お妃! 貴女は私をいゝ傀儡にしたのですね。何の恨みがあつて貴女は私に——そんな惨酷な死に恥をかゝせるのです。あゝもしも之が本當なら……

妃 お氣の毒ながら本當です。けれども妾が貴方に何の恨みもありやしないと云ふ事も本當よ。

子貢 もう澤山だ! 芝居は分つた。凡ては孔夫子に對するあばずれ女の馬鹿々々しい反抗に過ぎないのだ。此妃は自分の芝居に何とか淺薄な理由をこじつけてゐるが、實は只闇の光りに對する生れつきの憎惡に過ぎないのだ。此妃は始めから其つもりでやつて來たのだ。評判な孔夫子と云ふ人物がどんな男か一つ見ておくのも話の種子位ひに思つて。そして一應その様子をためして見た上で、事によつたらちよつと引つかけても見、又事によつたら冷やかしてやらう位に思つて來たのだ。處で孔夫子と云ふ方はどんなによく相手の腹の底迄見ぬいてゐらしてもあんまりひどい人の醜惡をあばき出してのしるなんて事のお出來にならない方だ。そんな場合には只一言お叱りになる位が關の山の聖人だ。併し此若い俺にはそれでは我慢が出來ない。大人氣ないやうでも矢つ張り惡意を持つものゝ見えすいた醜さはちよつと一皮ひんむいてやり度くなる。そして光りに對する智慧は

闇に向つても如何に鋭いものかを示してやる必要を感じるんだ。だから俺は序でもう一皮むいてやらう。此見榮坊の女は自分が王後の身であり乍ら夫子をこんな遠くの山中迄態々出迎えに來たやうに思はれては業腹なので、態と臘服を着けて狩をしに來て、偶然に遭難中の夫子を見つけ出した體にしやうとしたんだ。そして一つ恩を着せやうと思つた處が、一足先きに此攝政が來て了つてゐて、おまけに夫子との契約まで済んだ後だつた。それが第一此女の疖にさはつた。始めに此女がいやに興奮した調子で夫子を崇め奉つたと云ふのも實は腹の中にさうした疖が起つてゐたからの事だ。處が其お世辭にも拘はらず、夫子のお言葉は中々嚴しかつた。そこで尊嚴を傷けられた此負けぬ氣の妃はむらくと業を賣やして「おのれ憎い孔子奴」と思つた。此お芽出度の攝政を得意な色仕掛けで弄絡しかゝつて、まんまと成功し、夫子から奪ひとつた得意さで、女らしい勝鬨をあげ

「之でせい／＼した」と云つたのはさう云ふわけだ。

妃 憤然として大臣に眼くばせする。大臣劍を抜いて子貢を斬らんとするのを攝政も亦劍を抜いて割つて入り、それを遮切り止む。子貢は腕を組んで大臣を冷笑する。

攝政 君が亂暴をするなら僕も家來の面前で死に恥をかゝせられた自暴腹だ。今となつては此善人の血を見す／＼君に流させる氣にはなれない。決闘の相手なら僕がやる。お望みなら軍勢の力に訴へても。

大臣止むなく引つ込む。

顔回(子貢をなだめる)子貢。もう充分だ。君は少し云ひ過ぎた位だ。

子路 何で云ひ過ぎたもんですか。僕はもつと腹が立つてゐる。此怪しからぬ冒瀆が許せるものか。

子貢 何、僕はもう此上何も云ひはしないよ。只ちよつと事柄をはつきりさせれや

僕の氣は濟むんだ。こんな馬鹿々々しい騒ぎに夫子を擔ぎ出すのは勿體ない。僕らで澤山だからね。一寸片付けてやつたんだ。

子路 あゝ、色を慕ふやうに徳を慕ふものを俺は未だ見た事がない、とお歎げきになつた夫子のお言葉をしみく思ひ出す。だが、たはけた芝居のおかげで早く事柄に鼻がついて、態々遠い宋のくんだり迄夫子の御足勞を煩はして貴い御時間をおつぶしにならずに濟んだのは一方此賣女ばいどの手柄でもあつた譯さね。

子貢 悪は悪同士お互に成敗して結局善の道を開けさすんだ。うまく出来たものだ。ハツハツハツ。

子路 ハツハツハツ。

攝政 (劍を鞘に收め) あゝ、俺は結局何からも見捨てられて了ふのか。

孔子 攝政、貴方は決して悪い人ではない。よし貴方の云つた事には偽りがあり、

又貴方の腹の中には多くの不忠者や、悪企みの野心家がゐやうとも、貴方は悪人ではない。だがわしの名望の前に跪く如く、貴方は又色の前に跪く。わしに會つてゐる時はわしに従ふが、世俗が來て誘ふ時には又わしに背を向ける者にわしは味方となる事は出來ない。わしの爲めに凡てを擲げ捨てる勇ある者のみわしの弟子となる事が出来るのだ。

攝政 夫子よ。私は貴方をお救ひしたのに貴方は私をお捨てになるのですか。

孔子 攝政。貴方が此處でわし達を救つて下された恩はわしは忘れない。だがわしは忙しい。それにわしはもう既に歩き疲れた。口で説く事にも疲れた。わしの本願や、熱心は素より少しも衰へはしないが、併しわしの體にはもう既に老衰が來てゐる。わしはもう前のやうに體で充分に働く事が出來ない。わしは之から魯へ歸り、そして今後の餘生を著述に捧げやうと思ふ。

子路 ではお歸りになりますか。

子貢 お筆をお執りになりますか。

孔子 おゝ、わしはさう定めた。先刻見た夢はわしにその道を示すお告げであつたのだ。わしは之から筆に全力を傾けて先聖の道を世に傳へ、後世の人々に人生の本道を示して、永く世の據り處となす事にわしの餘命を捧げやうと思ふ。それが天の御意である事をわしは今感じる。

顔回 それが宜しふりませう。

妃 ふむ。現代に失望して後世に知己を待たうと云ふお考えですわね。御尤もですわ。貴方はその事に託して伯夷叔齊の例に倣はうと被仰るのですわね。飽く迄も此現代に踏み止まつて、聖い血を流しながら今現に生きて苦しむでゐる人達に藥を施さうとはなさらないで、後世の知己などと云ふ空漠とした無形の愛人に貴方の愛を

注がうと被仰るのですわね。おゝそれは何と云ふ幸福な、しかし容易い事ですわ。

貴方が捨てやうとなさる者こそ、貴方が一番愛想をお盡かしになる者こそ、實は最も貴方を必要としてゐる重病人であるのに、貴方はそれを振り捨て、安樂なお書齋に閉じ籠らうと被仰るのですわね。なるほど、それは仁者でなければ、本當の聖人でなければ、出来ない事ですわね。

孔子 禍なる女よ。口先許り巧みにして眞理に縁なき者よ。自ら癒ゑる事を欲しない病人をいかな名醫が治す事が出来るか。そなたはそなたの一番美しい晴れ着をそなたの閨の中に着て行かうと思ふか。宴會に着て出やうと思ふか。そなたの化粧した顔を盲人に見せやうと思ふか。眼あきに見せやうと思ふか。誰かそれを知り乍ら唯一つの種子を灰の中に投げ捨てる者があるか。過つて改むる心なき者をわしは如何ともなす事は出来ない。改むる心あり乍ら過つ者のみわしは改めさす事

が出来たのだ。お、幾千幾萬の種子をわしは不毛の地に投げ捨てた事であらう。眞理を見れば敵と思ふ頑なる者にいかに多くの眞理をわしは惜し氣なく叫んだであらう。唯わしをへこまさうとて尤もらしき偽りを弄ぶ者にわしはいかに諄々として倦ますわが道を述べ語つた事であらう。お、養い難き者よ。石の如き心持つ者よ。そなた達の國はそなた達の望むがやうになり過ぎるであらう。邪淫の雲は天を暗くし、陰謀と叛亂とは地に相繼いで起り、恨みと呪咀とは國內に漲り、そなた達がそなたの夫を裏切り、苦しめた如く、そなた達を裏切り、苦しめ、そなた達は罪深き閨の中に弑客の幻影を見ておのゝき、そなた達を賣國奴と呼ぶ暴民の襲來を防ぐ者は無くなり、癩病人の如くそなた達はうめく時が来るであらう。人の事のみ議する者よ。天罰を畏れる事を知るがい。

間。

妃 (ある恐怖を感じておのゝく。前の如く勇氣なき、反抗心を以て) 妾は貴方のその聖人らしい呪ひのお言葉に對して、反對に唯かう祈ります。貴方の之から骨を折つてお書きになる多くの書物が何時か亂暴人の手で、焼かれて了ふやうな事がないやうに、そして後世に知己を獲やうと云ふ貴方の淋しいお志しが空しくなるやうな事がないやうに、と。

孔子 たとへ人間の悪意がいかにその焼かれる事を望まうとも、又たとへその總ては焼かれ、わしの教を奉づる者は生き埋めにせられやうとも、そは枯草に點ぜられた火が原野の表面を焼くに等しい。何人かゞ死を賭してもわしの書を隠すであらう。もし一冊でもわしの書が此世の何處かの隅に残るならば、地の底深く生きる大地の生命が永劫春の土から芽を萌え出す如く、わしの教えは人心の底の底迄も浸み込んで、無窮に萌え出る事を止めはしない。わしは人間の最も深い心を

最早堅く擱んでゐる者だ。六十年の間わしは此心を信じ、此心を天下にあさり歩いた。あゝ幾百度わしは欺かれた事であらう。而もわしは決して欺かれはしなかつたのだ！ 見よ。わしは人生を肯定し、わしの捷利を深く信じて大空の如く悠々と生きてゐる。天に非ればわしの生命に指をもふれる事は出来ない。

顔回 早や日は暮れかけて参りました。そろ／＼お出掛けになつては如何でムリませう。

孔子 人々よ。わしは常に平和を愛するものゝ味方だ。貴方々の上に平和と幸福のあらん事を。(と起ち上り杖を取り弟子達に) それでは出掛けるとしやうか。

三人の弟子 畏まりました。

顔回、子貢、子路、それ／＼取るべきものを取つて立ち上る。一同の沈黙の間に孔子と其の弟子達とは徐ろに其處を去る。

妃は立つた儘孔子を憎く／＼しげに見送つてゐる。大臣は太息を吐き乍ら彼女の手を取つて同じく孔子を見送り、攝政は悄然と俯向いてゐる。

幕

一九二〇年一月二三日作  
一九二二年一月改訂

作者附言。

此作は殆ど全部作り物である。孔子が陳蔡に厄に遭つたと云ふ史實はある。孔子が楚に行く時陳と蔡との二國が自分達の國の運命を案じて道に孔子の一行を遮ぎり、七日間苦しめたと云ふ話がある。其間に子貢が野人から米を買ひ入れて来て飯を焚き、顔回がその埃のついた處を人知れず食べた事でそれを竊み見た子貢が、「仁人廉志も窮しては節を改むるか」と孔子に訊ねて、さとされた云々の話がある。かくて七日の後楚の太夫鬬巢と云ふ者が来て孔子を救つたと云ふ事になつてゐる。又衛國に南子と云ふ妃があつた。宋國の女で、宋公子朝と云ふ者と姦通し、蒯聩と云ふ自分の王子に暗殺されかけたりした有名な美人で又淫奔な妃であつた。此女が孔子を招いた時子路が憤慨して孔子の行く事を反對した。が孔子は

「彼正を失すと雖も我に於て何ぞや」と云つて構はず出掛けて行つて逢つた。云云の事蹟も記されてゐる。此等の事蹟を自分は勝手に配合し、結び合せて此脚本を作つた。

大正十一年四月二十七日印刷  
大正十一年四月二十五日發行

二週間  
〔定價金五拾錢〕

著者	長 與 善 郎
發行者	東京市神田區表神保町十番地 福 岡 益 雄 郎
印刷者	東京市本郷區湯島五丁目四番地 佐 藤 三 郎
印刷所	東京市本郷區湯島五丁目四番地 共 同 社 印 刷 所

發行所 東京市神田區表神保町十 金 星 堂

電話神田 三八五三番  
振替口座東京 三三二八番



金星堂

# 名作叢書

▼ 森田恒友氏裝幀  
▼ ホケツト形新裝美本  
▼ 定價各冊金五拾錢送料四錢

文藝の機運大に動くの時本叢書は破天荒の至廉なる定價を以て現文壇諸家の最も自信ある珠玉の名篇のみを提供せんが爲に生れたるものにして我が文藝の精粹を網羅す。即ち收むるところの小説及び戯曲は何れも現實の人生に徹して興味深く何人の胸にも強く強く響くと共に高朗の韻を永久の未來に傳ふ。あゝ誰か此叢書を讀まずして日本の新藝術を知れりと言ふを得んや。

1・長篇小説 曠野の戀

愛慾の情みを中心としたる代表的傑作也

田山 花袋

2・創作選集 離るゝ心

最近の力作者にして「勝敗」「復讐」の二篇を添ふ

徳田 秋聲

3・長篇小説 人さまざま

發表の當時世評噴々たりし名篇にして附録に「妹の縁談」あり

正宗 白鳥

4・戯曲選集 父歸る

この名篇の他に「茅の屋根」「温泉湯小景」等七篇を收む

菊 池 寛

5・長篇小説 友と友の間

友と友との戀の三角關係を描寫したる代表的力作也

菊 池 寛

6・長篇戯曲 牧場の兄弟

社會劇として上演されたる雄篇にして「地蔵教由來」を添ふ

久 米 正 雄

7・創作選集 懶い春

代表的力作懶い春の他に「工廠裏にて」等數篇を收む

久 米 正 雄

8・長篇小説 邪宗門

藝術の包ひ最も高き近來の珠玉の名篇なり

芥川 龍之介

9・創作選集 銀二郎の片腕

名人の精神を凝らせるものにして「父親」「箱根行」等を收む

里 見 弴

10・長篇小説 彼女と青年

若き男女の強い戀物語にして全卷を貫く才筆を見よ

里 見 弴

11	長篇戯曲	恐怖時代	深刻を極めし稀有の名脚本にして上演直に好評を博す	谷崎潤一郎
12	長篇小説	童	力作中一代に鳴る名篇にして附録に「鶴唳」を添ふ	谷崎潤一郎
13	長篇小説	甚	代表的傑作にして人生の全景を展開して深刻を極む	藤森成吉
14	創作選集	鼠	好評の傑作にして「母」「雲雀」の玉篇を収めたる佳品也	藤森成吉
15	創作選集	花と實と棘	従来の作品中より其精神を抜きたる稀有の逸品也	佐藤春夫
16	長篇戯曲	二週の間	現代劇の代表作にして附録に名曲「孔子の歸國」を添ふ	長與善郎
17	創作選集	恭三の父	名作恭三の父の他に代表的作品三篇を収む	加能作次郎
18	創作選集	祖母	發表の當時世人を驚がした名篇にして他三篇を収む	加能作次郎

19	戯曲選集	水のおもて	代表的名篇のみを集めたる他に類例なき脚本	久保田万太郎
20	長篇小説	九月の慟	發表の當時噴々たる好評を得たる名篇にして他一篇を附す	久保田万太郎
21	長篇小説	或女の犯罪	深刻と凄壯を極めたる傑作にして「労働者誘拐」を収む	江口渙
22	長篇小説	屋根裏の戀人	作風一轉機せる代表作にして名作「あの頃の事」を附す	宇野浩二
23	長篇戯曲	津村教授	上演されたる名脚本にして他に「穴」の一幕物を添ふ	山本有三
24	長篇小説	死兒を抱いて	若き女の懺みを描きたる獨特の優秀なる作品也	廣津和郎
25	長篇小説	月光曲	ロマンチックなる名作にして全巻を貫く真情流露の筆致を見よ	田中純

以下續刊

金星堂發行



389
73

終

